



タイへトラフィッキングされた
カンボジアの子ども、青少年に関する調査報告

－ 心的外傷となる経験の検証 －

特定非営利活動法人 国境なき子どもたち
大竹 綾子

第二版 2003年11月25日作成

目次

1 はじめに	3
1.1 背景.....	3
1.2 カンボジアにおける越境トラフィッキングの概要.....	4
1.3 政府、非政府レベルでの対応.....	5
1.4 「若者の家」プロジェクトと、本調査の目的.....	6
2 調査のアプローチ、方法	8
2.1 方法、手法.....	8
2.2 調査協力者および定義.....	8
2.3 調査の限界.....	12
3 調査で明らかにされたこと	12
3.1 タイへ至る経緯.....	12
3.2 苦悩の日々.....	20
3.3 家庭問題.....	28
3.4 社会心理的影響.....	30
3.5 被害者の社会への再統合の難しさと制約.....	39
4 結論ならびに提言	40
4.1 結論.....	40
4.2 提言.....	41
4.3 将来に向けて.....	42
5 おわりに	43
用語集.....	44
資料.....	45
付録 若者との聞き取り調査のための問診表.....	47
謝辞.....	51

1 はじめに

1.1 背景

近年、子どものトラフィッキング（人身売買）は、特にアジアにおける危機的な現象として世界的に関心を集めている。国連の推定によれば、自己の意に反して売買され、何らかの形で強制労働を強いられる人の数は年間 400 万にもものぼり（脚注 1）、うち約半数が子どもや青少年である。このような事態に対処すべく、さまざまな国際活動が展開されている。例えば、1996 年、ストックホルムで開催された第一回「子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」、2001 年、横浜での同第二回会議などである。これら会議においては、国際レベルで速やかに行動を起こすことが呼びかけられ、多くの政府や国際、地域機関が国内、地域レベルで、人のトラフィッキング撲滅に取り組んでいる。

社会的弱者である若者のトラフィッキングは、その形態の如何を問わず、「最悪の形態の児童労働」をも含む人権侵害行為である（脚注 2）。カンボジアは、世界で最も広く認知された子どもの権利保護のための条約、国連「児童の権利に関する条約」（UNCRC）の批准国である。同条約のもと、すべての児童は、あらゆる形態の暴力、性的搾取、有害な労働から保護され、教育と医療保健のサービスを受ける権利を有する（脚注 3）。

トラフィッキングはカンボジア国内のみならず、国境を越えてさまざまな目的でおこなわれる。経済の発展とそれがもたらす経済のひずみ、観光産業、また近代通信技術などの発達により、ますます国際化し広い地域にわたる問題となりつつある（脚注 4）。人々は職やよりよい生活を求めて移動する。大人たちがより高い収入を得ようとタイに出稼ぎに出る一方で、何千という女性や子どもたちが不法組織に利用され、トラフィッキングにあい、そして搾取されている。犠牲となるのはいつも子どもや若者で、いったんトラフィッキングされてしまうと人道的援助を待つしかすべがない。そういった子どもたちは、タイにいるあいだトラフィッカー（人の不正取引人）に服従させられ、強制労働、物乞い、売春を強いられる。こうした形態のトラフィッキングは、労働搾取の目的で、子どもたちを暴力や脅し、詐欺や借金の肩代わり、などで連れ去り取引するものである（脚注 5）。子どもや青少年たちは半奴隷的な労働条件を強いられ、一生消え得ないような心身の傷を負うことになる（脚注 6）。多くの若者が薬物中毒に陥ったり性的搾取されたりというさまざまな危険にさらされる。

¹ David W. (World Vision) 'Child Trafficking in Asia'

² Panudda B. and June K. 'Trafficking of Children: The problem and responses worldwide'

³ Stacey S. 'How UNICEF is working to curb the sexual exploitation of children'

⁴ Panudda B. and June K. 'Trafficking of Children: The problem and responses worldwide'

⁵ Panudda B. and June K. 'Trafficking of Children: The problem and responses worldwide'

⁶ IOM (2002) *Review and Assessment of the Situation of the Returned Cambodian Children and Women Trafficked to Thailand and of the Assistance and Reintegration Mechanisms in Cambodia* Researched by Sonia M., Lath P.

1.2 カンボジアにおける越境トラフィッキングの概要

カンボジアは、トラフィッキング被害者となる子どもの送り出し国であるとともに、経由国および送り先国でもある。国内で地方から首都プノンペンにトラフィッキングされる子どもたちがいる一方、圧倒的多数の子どもたちは違法なルートでタイへトラフィッキングされる。社会的弱者である女性を支援する主な組織 Cambodian Women Crisis Center (CWCC) が 2001 年に行った調査によれば、タイから国外追放になり国境に送還されるカンボジア人は、毎月およそ 1,650 名にのぼり、そのうち約半数は女性と子どもである。

過去数十年にわたる内戦や政情不安の後、カンボジアの人々は貧困にあえいでいる。世界規模で移民が増加する傾向にあるなか、多くの人々は、富める隣国タイ（少なくともそのように映る）に魅了され国境を越える。ILO-IPEC 国際労働機関児童労働撲滅国際計画が述べているように、近年の政府による不法移民労働者追放処置で、少なくとも三十万人が国外退去となったが、そのため逆に、国境を越えタイにトラフィッキングされる子どもたちを含めたタイへの不法移民をさらに地下組織化し、彼らをもっと搾取されやすい立場へと追いやっている。これらに対して子どもと女性のトラフィッキング撲滅、およびトラフィッキング被害者支援のための二国間協力に関する理解のための覚書が 2003 年 5 月、タイとカンボジア両政府間で調印され、二国間協力の更なる強化に期待が寄せられる。

カンボジアからタイへ越境する主要ルートは、1) バンテイミエンチェイ州ポイペトからアランヤプラテートに至るルート 2) ココン州ココンからホクレクに至るルート 3) 森、平野、山岳地帯を抜ける不法ルートである。こうしたカンボジアからタイへの人の流れに加え、何百という少女がベトナムからカンボジアに連行され、その多くは首都プノンペンの性産業にトラフィッキングされているという報告もなされている。また、多くの子どもたちがカンボジアの東南部からベトナムのホーチミン市へ物乞いに出かける。

トラフィッキングの被害にあった子どもたちがカンボジアに安全に帰還することができるように中央、地方政府当局、NGO（非政府組織）などが、送還の手助けやシェルターの提供を行っている。こうした被害者は帰還後もなお心的外傷の後遺症に悩まされるうえ、教育や職業技術も十分でない故に、さまざまな困難に直面することが考えられる。さらには、そういった子どもや若者の社会への再統合を支援する体制が家族や地域社会において整っていないという問題が存在する。結果として、多くの子どもたちは再び家族にネグレクトされ、タイに再トラフィッキングされるか、或いは街のギャングとなって以前のような不安定な生活を繰り返してしまう。

1.3 政府、非政府レベルでの対応

1.3.1 送還の仕組みと政府の関わり

このような危機的事態をふまえ、CNCC カンボジア子ども評議会提唱の下、「子どもの性的搾取およびトラフィッキング防止のための 5 年計画」がカンボジア政府により正式に採択された。カンボジア子ども評議会とは、国連子ども人権条約に従い、子どもに関する諸問題を解決するための計画や調整を行なう政府機関であり、その主な活動は、トラフィッキング防止、被害者の保護および救済そして必要なサービスの提供や法的措置を講じることを中心としている。MOSALVY 社会福祉労働省は、ユニセフ国連子ども基金や IOM 国際移住機関による技術、資金支援のもと、トラフィッキング被害者の女性や子どもたちの安全な帰還と再統合をはかるため、持続性のある送還体制を確立した。目下のところ、IOM 職員が、タイの移民収容センターや政府の福祉シェルターなどでカンボジアの子どもを見つけ出し、安全なルートで帰国させている。こういった子どもたちは、ポイペトにある政府一時受け入れセンターを経て、家族の元へ戻るか、またはリハビリや社会再統合準備のためバタンバンにある受け入れセンターや他の NGO 非政府組織シェルターへ送られる。

タイで IOM 職員に発見される機会のなかった被害者たちは、タイ政府により直接強制送還され、親やトラフィッカーの待ち受ける国境に放り出される。それ故、リハビリのために安全に保護されることもなく、再度トラフィッキングの危険にさらされるのである。実際のところ、IOM に発見される子どもの数は限られている。タイ政府によってカンボジアに追放される子どもの数は、毎月平均 800 から 1,000 名にのぼるが、それに対して、2001 年に IOM が送還した子どもはわずか 152 名にすぎない。さらに、IOM の最近の調査が明らかにするところによれば、家族のもとに戻った子どものうち、実に 33% が再度トラフィッキングの被害にあっており、帰還プロジェクトが成功しているとは言い難い。IOM の研究者は「被害者を単に家族のもとに帰すだけでなく、リハビリの要素をプロセスに組み込むことが必要である」と強調する（脚注 7）。トラフィッキングはさまざまな要因が絡む問題であり、現実的に被害者の再統合が完全に遂げられているとはいえない。

1.3.2 トラフィッキング撲滅のための NGO 活動

政府の対応と等しく重要な役割を担っているのが国際、地域 NGO で、トラフィッキングの防止とその被害者支援のためにさまざまなプログラムを実施している。調査、シェルターの設置、地方当局のキャパシティビルディング、再統合支援、アドボカシー活動など、さまざまな事業が展開されている。

⁷ IOM (2002) *Review and Assessment of the Situation of the Returned Cambodian Children and Women Trafficked to Thailand and of the Assistance and Reintegration Mechanisms in Cambodia* Researched by Sonia M., Lath P.

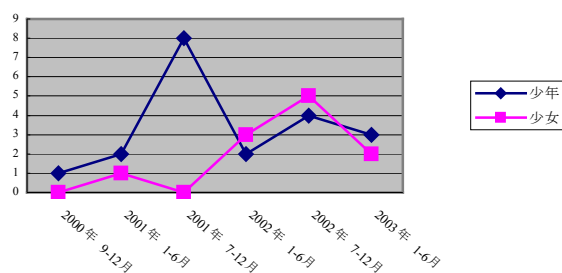
NGO のシェルターでは子どもたちが家族との生活に戻るか、あるいは独立して仕事に就くことができるまで、医療保健サービス、識字教育、生活訓練、職業訓練、カウンセリングなどを受ける。しかしながら、トラフィクト・チルドレン（トラフィッキングの被害にあった子どもや若者）を積極的に受け容れるシェルターの数は十分でなく、その収容人数もかなり限られている。さらに、そうしたシェルターの殆どが短期滞在型で、トラフィッキング被害者に特別なケアを施せるような長期型のセンターは非常に少ない。特に男子に対し十分な心のケアを施せるようなシェルターは全くなく、男子の性的虐待といった特殊な問題について配慮がなされていないことは明らかである。

これら活動に加え、いくつかの NGO ではデイケアセンターを設け、予防的手段としてストリート・チルドレンに基礎教育や、食事、医療保健サービスを与えている。ユニセフや他の NGO は地域社会ベースの児童保護ネットワークを設け、ボランティアの協力の下、社会経済的基盤の脆弱な村々を対象に、子どもの保護活動を展開している。タイ政府によって強制送還に処せられた子どもたちがシェルターに保護されるよう、ソーシャルワーカーを国境に配置している NGO もある。また、ストリートチルドレンをトラフィッキングの危険から守るため、ポイペト、バタンバンやプノンペンでは、さまざまな活動がストリートベースで NGO により展開されている。それとあわせ、いくつかの NGO は被害者を救済しトラフィッキングの犯罪人を起訴する法的支援も行なう。

1.4 「若者の家」プロジェクトと本調査の目的

「若者の家」は、かつて恵まれない状況に置かれていた 15 歳から 19 歳の青少年支援を目的とし、2000 年 9 月に開設された。当初の受け容れ対象はストリートチルドレンだったが、トラフィッキングが増加の一途をたどり、とくに年齢の高い子どもたちを受け容れるシェルターの収容力が不足しているという状況を鑑み、国境なき子どもたち（以下、本文中 KnK と略す）は、トラフィクト・チルドレンの受け入れを開始した。「若者の家・バタンバン」はこれまで 83 人の若者を受け容れてきた。図表 A の示すとおり、トラフィクト・チルドレンの人数は急増し 31 人、すなわち居住者の半数を占めるに至っている。

図表 A 「若者の家」に新たに受け容れられたトラフィクト・チルドレン人数の推移



「若者の家」プロジェクトは青少年に対して長期滞在型のセンターを提供し、トラフィッキング被害者のリハビリ、再統合支援の一環を担う。多くの NGO シェルター同様、「若者の家」でのプログラムは衣食住の充実、識字、算術教育、職業訓練、医療保健サービス、カウンセリングなどの必要サービスの提供とともに、家庭の評価、再統合そしてその後のフォローアップからなり、今までの事業の成果は評価に値すると思われる。トラフィッキング・チルドレンはストリートチルドレンに比べ年齢層が低く、「若者の家」で勉学や職業訓練を完全に終了したものはまだいない。31人のトラフィッキング・チルドレンのうち、25名は公立学校で勉学中か職業訓練の途中であり、4名が逃走、また3名は家族の元へ戻った。逃走した4名のうち3名はタイに再度トラフィッキングされたのち「若者の家」に再入居した。

「若者の家」での観察を通じて、トラフィッキング・チルドレンにとって社会へ再統合するプロセスはストリートチルドレンや他の貧困家庭出身の子どもたちよりも更に困難であるということが判明している。第一に、こうしたトラフィッキングの被害者を家族へ再編入することにはリスクがともなう。彼らの家族は居所を転々とする傾向にあり、再び子どもを売ったり貸し出したりする可能性があるからだ。第二に、トラフィッキング・チルドレンの大多数が必要最低限の識字力、社会生活能力を持ち合わせていない。就学経験もなく家庭でもネグレクトされていたために、彼らを一人前の社会人として育て上げるにはかなりの時間を要する。さらには、数多くの子どもたちが感情面での問題を抱えていたり、問題行動をとったりする。子どもたちは本当のことを言いたがらないことが多く、または自らの問題に気づいていなかったりする。それに加え、プロジェクトのスタッフがどのように問題に対処してよいかわからない、または問題の根幹に気づきさえしないという場合も多々ある。

トラフィッキング・チルドレンの支援、再統合の難しさをふまえ、KnKは被害者の子どもや青少年が帰国後に抱える問題やその原因の究明にあたることにした。その目的は、解決策を模索し、我々が被害者である子どもと青少年のために取り組むべき具体的なニーズと実態に即して手段を講じることにある。

以下、今回の調査の具体的目標を示す。

1. タイから帰国した被害者の子ども、青少年が直面する問題を明らかにすること
2. タイにトラフィッキングされたいきさつや、タイでの状況、トラフィッキング以前以後の両方において子どもの抱えていた問題に関する情報を集めることにより、問題の根本的原因を検証すること
3. 現在行なわれているトラフィッキング撲滅および被害者支援活動の調査および評価
4. 被害者支援のための KnK 事業強化、及び関係施設に対する提言

2 調査のアプローチ、手法

2.1 方法、手法

特に青少年に焦点を当てたトラフィッキング被害者の具体的なニーズを明らかにするため、以下の5方法に従い、計量的、質的両面からデータを収集。

- a. 調査に先立ち、関係文書、文献、および関係機関、組織のインターネットサイトを検討、分析。
- b. 帰還後およびタイにいる間に直面した問題を明らかにするための、青少年との細部にわたる聞き取り調査。
- c. 筆者および KnK ソーシャルワーカーによる若者の行動、感情面での特徴と変化に対する日々の観察。
- d. シェルターで働くソーシャルワーカーからの聞き取り調査を行い、彼らの被害者に対する観察を知ることにより、被害者支援における難しさを明らかにした。
- e. シェルターを運営している政府、非政府機関、組織を訪問し、現在のプログラムについて聞き、評価した。

2.2 調査協力者および定義

2.2.1 調査の対象となった場所

ポイペトとシソボン、バットンバンおよびプノンペンが調査の対象地域として選ばれた。IOM 調査によればトラフィッキング被害者の95%、とくに子どもの過半数は、これら四地域の出身である。表1に示されたように、各地域の機関、組織を訪問したが、被害者のニーズとそれらのシェルターで行なわれている現在のプログラムの間はずれが存在することが判明した。

表1：（調査の対象とした）トラフィック・チルドレン支援センター

No.	名称	場所	受け入れ	中長期 ケア	デイケア	女子専用
1	Goutte d'Eau	ポイペト	*	*		
2	Cambodia Vision Development (CVD)	ポイペト			*	
3	Cambodian Children and Handicap Development Organization (CCHDO)	ポイペト			*	
4	Cambodian Women's Crisis Center (CWCC)	シソポン	*	*		*
5	Field Relief Agency (FRA)	シソポン		*		
6	Battambang Reception Center (BRC)	バッタバン	*			
7	Meatho Phum K'omah (MPK, Homeland)	バッタバン		*		
8	Komarrikreay (KMR)	バッタバン		*		
9	Santepeap II	バッタバン		*		
10	Coconuts House	バッタバン		*		*
11	Neavea Thymey World Vision	プノンペン		*		
12	Harvest International Service Cambodia (HISC)	プノンペン		*		
13	Cambodian Center for the Protection of Children's Rights (CCPCR)	プノンペン		*		*
14	Agir pour les Femmes en Situation Precaire (AFESIP)	プノンペン		*		*
15	Ban Pumiveth (Home for Boys)	タイ		*		
16	Pak Kred (Home for Girls)	タイ		*		*
17	Nonthabri Reception Home for Destitute	タイ		*		

2.2.2 調査協力者

110名の子どもの対象に細部にわたる一対一の聞き取り調査が行なわれた。子どもの内訳は、1) タイにトラフィッキングされた：55%、2) 長期にわたり路上生活：21%、3) 他の理由から危険にさらされている：16%、4) カンボジア国内でトラフィッキングされた：8% である。年齢層は15歳から21歳で、そのうち女子の割合は40%であった。前述1)に分類される若者のほとんどは、現在、政府系、或いはKnK「若者の家」を含めた非政府系の施設に保護されている帰還者である。110名のうち8名はベトナム系。また、全体の30%がタイとの国境にある難民キャンプで出生している。

表 2: 調査対象者

背景	少年(60%)	少女 (40%)	計 (100%)
トラフィクト・チルドレン			
KnK 若者の家	17	10	27
他のシェルター	24	10	34
小計			61 (55%)
ストリート・チルドレン			
KnK 若者の家	12	2	14
他のシェルター	8	1	9
小計			23 (21%)
孤児、或いは極貧家庭出身者			
KnK 若者の家	5	9	14
他のシェルター	0	4	4
小計			18 (16%)
国内 トラフィクト・チルドレン			
KnK 若者の家	0	3	3
他のシェルター	0	5	5
小計			8 (8%)
計	66	44	110 (100%)

諸機関のソーシャルワーカー、エドューケーターまた代表者の聞き取り調査も行い、トラフィッキング被害者の子ども、若者支援の難しさについて聞いた。関係国際機関、政府当局、重要情報提供者を訪問することは、被害者の支援体系のみならず、カンボジアからタ

イへのトラフィッキングの全体像を理解するのに大いに役立った。さらには、バンコク不法移民収容所やタイのノンタブリ州において3箇所の政府系センターを訪問した。

いくつかの聞き取り調査を行なううちに、対象者は他のシェルターから、「若者の家」居住者に絞り込まれていった。一度だけの聞きとり調査では、具体的な情報、とくに青少年被害者にとってもっとも深刻な影響である、心の問題を導き出すのが困難と判断されたためである。二名の男性インタビュアーに加え、女子に対しては、性の問題に至るまで心を許して話ができるよう「若者の家」の女性のエドゥケーターが加わった。こうした軌道修正のおかげで、「若者の家」での日々のより親密な関係や観察が可能となり、被害者の過去や現在について、より正確で実情を反映した情報聴取をすることができるようになった。

2.2.3 定義

「トラフィッキング」という言葉の定義について世界的な統一定義は存在せず、さまざまな場面で議論が繰り返されている。したがって、ここではその定義について議論することを避け、IOM で用いられ、国連総会で採択された定義を用いることとする。「人、とくに女性および子どもの不正取引の防止、禁止および処罰のための議定書」(2000年) 第3条9項の定義によれば、

「人のトラフィッキング」は、以下のように定義される。

脅迫、力、もしくはその他の強制的手段の使用、誘拐、不正手段、詐欺、権力の濫用、または弱者の立場に付け込む、金銭もしくは利益の授受や他のものを支配する立場にあるものの同意を得んがためなどの方法により、搾取の目的のために人を徴集、輸送、移送、監禁、受領したりすること。搾取には、少なくとも、他人の売春の搾取、その他の形態の性的搾取、強制労働或いは用役、奴隷制もしくはそれに準ずるもの、奴隷的境遇、強制的臓器の摘出が含まれる。

子どもと青少年に関しては、上記の定義の例外となる。搾取目的で徴集、輸送、移送、監禁、受領された児童(満18歳未満の者すべてを指す)は、たとえ脅迫、力や強制、誘拐、不正手段にかかったり、騙されたり、虐待されたり、売られたり、貸し出されたりした場合でなくても、すべて「トラフィッキング被害者」として扱われる(脚注8)。

上記から「トラフィッカー(人の不正取引人)」とは、搾取目的で他人を徴集、輸送、移送、監禁、受領する者を意味する。

⁸ IOM (2002) *A Study on the Situation of Cambodian Victims of Trafficking in Vietnam and Returned Victims of Trafficking from Vietnam to Cambodia* Researched by SRDC

2.3 調査の限界

トラフィッキングは、配慮を要する繊細な問題であり、調査協力者の多くは、特にタイでのつらい経験に関し具体的な情報を提供することには消極的であった。そのため、子どもたちの搾取や虐待の状況を詳細に調査することは困難であった。それに加え、訪問したシェルターのソーシャルワーカーの多くは、心の問題について十分な認識がなく、このため、子どもの問題行動や心の状態について、彼らの観察に基づいた有効な情報を得ることは容易ではなかった。更には時間と調査対象人数の限界上、トラフィクト・チルドレンと、ストリートチルドレンなど他の子どもたちとの比較が困難であった。調査対象人数の制限上クオンタティブ（計量的）データの有効性は低くなり、クオリタティブ（質的）発見のほうが、信頼性が高いといえる。

3 調査で明らかにされたこと

3.1 タイへ至る経緯

3.1.1 ポイペト - タイへのゲートタウン

タイとの国境に位置するポイペトはトラフィッキングにおいて重要なポイントとなる街である。IOM, MOSLAVY の支援をうけて、タイから帰還したトラフィクト・チルドレンのうち、以前、ポイペトに住んでいたかもしくはポイペト在住の家族がいる者は全体の 89% に達する（脚注 9）。政府とクメール・ルージュの長期にわたる内戦終結後、ポイペトは急速に拡大、発展を遂げ、越境貿易は人々に仕事の機会をもたらした。それと同時に、巨大なスラムが形成され、そこには多くの不法定住者がひしめきあう。大多数の者は国境沿いの仕事や、繁栄したタイの都市でのりよい職を求めてやってくるのだが、必死の思いでせっかくだどり着いても結局よい仕事にありつけず、絶望的にならざるを得ない。

ポイペトのストリートチルドレンや、不法滞在世帯人口は相当数にのぼり、最多のプノンペンに次ぐほどである。カンボジア人が国境を越えてタイに行くには 10 バーツするパスを提示するだけでよく、毎日 2 万人もの人々が生計を立てるため日雇いの未熟練労働者としてカンボジアからタイへ出かける（脚注 10）。国境付近のタイマーケットへはストリートチルドレンや幼児も含んだ何千という人々が、物乞いや、安い賃金で雇われた荷物担ぎまたはマーケットでの物売りとして働くため出かけていく。

⁹ Anneka F. (2002) 'Living In The Shadows' (IOM)

¹⁰ Anneka F. (2002) 'Living In The Shadows' (IOM)

国際労働機関児童労働撲滅計画の調査によれば、トラフィクト・チルドレンを送り出すような地域社会は、往々にして特有の脆弱な社会、文化、政治、経済的背景を持っている。共通するものは、貧困、教育の機会の制限、家族の機能不全、地域社会の政治的、社会的崩壊そして社会的排除である。ポイペトにはこういった項目すべてが当てはまる。

3.1.2 トラフィッキング被害者の概要

極度な金銭的必要に迫られている人々は、子どもを労働の助け、極端な例では主要収入源と看做す。多くの親たちが日々の生活費用を稼ぐのにすら子どもたちを頼りにしているような状況である。IOM が最近行なった調査では、トラフィクト・チルドレンのうち、その家族が定期的収入を持つ者は全体のわずか 3% である。実際、我々の調査対象者の半数以上が家庭で十分な食を得ることができなかったと話しており、三分の一が過度の長時間にわたり、強制的に家事手伝いや兄弟の世話をさせられていたという。

家庭の状況がトラフィクト・チルドレンを生み出す決定的要因となっている。過去の多くの研究から、トラフィクト・チルドレンの多くが片親、大部分は夫と別離したか夫に見捨てられた、母子家庭の出身であるということがわかっている。しかしながら、表 3 で示されるよう、今回の調査では半数以上の若者が、両親がそろっていた、もしくは母親の再婚相手と同居していたと答えている。日常生活費はなんとかなっていたとしても、親の死、病気、または家族の借金の蓄積など、何か危機的な状況が起これば、高利貸しから借金をしなくてはならないというのが実情である。

表 3: タイにトラフィッキングされる前の同居保護者

保護者	少年	少女	計
両親	11	8	19
母親	8	2	10
母親とその再婚相手	11	7	18
父親	2	2	4
父親とその再婚相手	2	0	2
親戚	2	0	2
隣人	2	0	2
孤児	1	1	2
路上生活	2	0	2
合計	41	20	61

聞き取り調査をした 61 名の若者のうち、40 名が十分な食べ物がなかったと答えている。

極度の貧困下、子どもたち、とりわけ若者は他のアジアの国々でもそうであるように、一家を支えるため金を稼ぐ責任を感じる。このことは、国内トラフィッキング被害者にも共通している点であり、表4の示すところである。一方で、ストリートチルドレンの場合は、家庭内の揉め事から逃れて家を出ることが多い。

表4: タイへ出かけた理由 (若者自身の見解)

理由	少年	少女	計
家計を支えるため	10	10	20
家族のいざこざから逃れるため	4	1	5
よりよい生活を求めて	2	2	4
家族の借金を返済するため	2	1	3
自分で生計を立てるため	3	0	3
家族、親戚、トラフィッカーなどに強要されて	20	6	26
合計	41	20	61

さらに、ストリートチルドレンが自らの決意で家を出るのに対し、トラフィクト・チルドレンは、より従順で、親に行くように言われるとそれを断らないようである。ここに、ポイペト在住の典型的な少女の例を紹介するが、トラフィッキングの被害者になりやすい若者のひとつのタイプといってもよい。

<事例報告>

ロタ (15歳女子)

ロタはカンボジアとタイの国境、最大の難民キャンプのひとつサイトII 難民キャンプで出生し、1992年カンボジアに送還された。家族は一時、バタンバン州に落ち着いたものの、家族全員を支えるには生活は苦しく、隣人に勧められるままよい職を求めてポイペトに移動。ビニールを張った竹製のあばら小屋で雨露をしのいだ。たくさんのゴミが散在する劣悪なスラムで、家族6人がたった一つの部屋で同居した。妹も含めて家族全員が、国境の「タイマーケット」で毎日働き始めた。魚を洗ったり、荷物を担いで国境を越えたり、外国人の客の傘もちなど、見つかる仕事はなんでもした。ロタと妹は、毎日、早朝から夜まで、15時間働き30から60パーツの日銭を稼いだが、稼ぎはすべて両親に渡した。言うまでもなく、ロタは学校に通ったこともなく、ほとんどすべての時間

をマーケットで働くことに費やした。それ以外の選択しはなく、来る日も来る日も一生懸命働いた。

ロタの両親は、ひんぱんにいさかいをしていたという。よくあることだったが、父親は酔うとひどく暴れた。一度母親を鉄の棒で殴ろうとしたこともあったし、また別のときにはナイフで脅した。ロタはそんな父親が怖かったし、母親を助けたくても幼くてなすべがなかった。

皆一生懸命仕事をしたが、一家の暮らし向きはよくなり、母親は病気になり胃の手術を受けた。そのため一家は多額の出費を余儀なくされた。どのくらいの額かはわからないが母親は隣人にも借金をしていた。そこで、10歳のときロタとその姉はタイマーケットに住み込みで働くことになった。ホームシックになり何度かポイペトの両親のところを訪ねた。ある日、父親がポイペトで爆発事故に巻き込まれ死亡したことを知らされた。

マーケットや国境で働く間、二度ほど警察に捕まり刑務所に入れられてひどい経験をした。ロタの記憶では、監房では文字通りブタのエサのような食事を与えられ、トイレの水を飲まされたという。また、狭い込み合った監房で酸素不足に陥って気絶したこともあったし、もっとひどいときには、警察官に監房の鉄格子に鎖でつながれた。刑務所ではいつもおびえ、泣き叫んでいた。思い出だけでも恐ろしく、腹の立つ経験であった。

現在、ロタは半日はある NGO のデイケアに通い、識字教育を受け、残りは家事をして過す。週末は母親とタイマーケットに出かけ魚を売る。今の生活には満足しているが、家庭の貧困状況を考えると、母親を助けるため毎日でもマーケットに働きに出かけたいと思っている。

3.1.3 トラフィッカーと人の徴集

ポイペトでは、仕事の機会が一時的な不安定なため、かなり多くの人々が実際トラフィッキングにかかわっている。そのほうが簡単により多くの金を稼げるため、トラフィッカーは国境を越えてタイに行き、相当なお金や現金を手にしたがっている子どもや大人を取引する。ある NGO の所長は、ポイペトの現状をこう嘆く。「お金は国境の向こう側にあるのです。こちら側、ポイペトには全くないというのに。」(脚注 11)

¹¹ IOM (2002) *Review and Assessment of the Situation of the Returned Cambodian Children and Women Trafficked to Thailand and of the Assistance and Reintegration Mechanisms in Cambodia* Researched by Sonia M., Lath P.

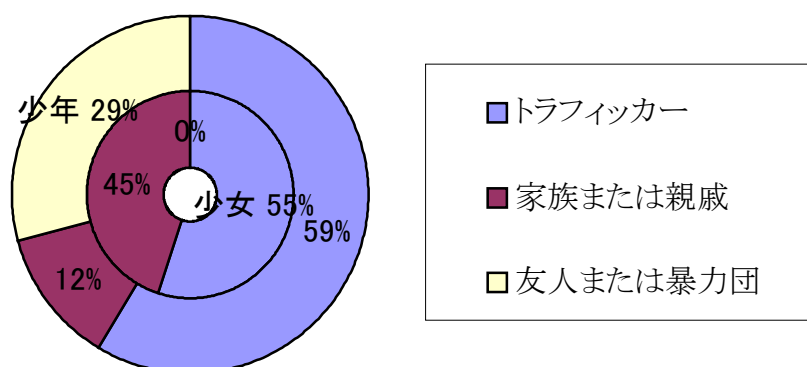
多くの場合、トラフィッカーは子だくさんの家庭に近づき、差し出されるであろう子どもの数や家庭の経済状況もよくこころえている。ほとんどの場合、世帯主の病気で借金を抱えているなどの家庭の危機的状況は、あらかじめ知られている。実際、タイで稼ぎを得られるような仕事にありつく手助けをしてくれるトラフィッカーを喜んで受け入れる家庭は多々ある。言い換えれば、子どもが労働搾取にあうことはおろか、売春宿に売られることすら知っている親もいるのである。

表 5: タイにトラフィッキングされたときの状況

状況	少年	少女	計
貸し出し	11	6	17
売買	10	3	13
自主的に	13	1	14
家族に強要されて	5	9	14
ストリートギャングに強要されて	2	0	2
トラフィッカーに騙されて	0	1	1
計	41	20	61

表 5 に見られるよう、カンボジアにおいては子どもの貸し出しが今日、最も簡単に行なわれていることは明らかである。この場合、親や後見人は3~6ヶ月の間、子どもをトラフィッカーに貸し出し、受け取った最初の前金を借金の返済にあて、トラフィッカーが“信用に足る”人物の場合、電話のシステムで毎月10~20ドルを受け取る。

図表 B: タイへは誰と行ったか



窮地に立たされ絶望した親の場合、自分の息子や娘を50~60ドルで売り飛ばすこともある。誘拐の事例も報告されているほか、トラフィッカー、隣人、後見人や友人に騙されるケー

スもある。また、小さな子どもは家族や親戚、年上のギャングに強制的に連れて行かれることもある。図表 B に見られるよう、多くのティーンエイジャーは大人と同伴でなく、仲間とともに自主的に出かける。いずれにしても、生活のため選択の余地はなく、他に稼ぐ手立てがないか、苦しい生活から逃れざるを得ない必要があるためである。

<事例報告>

ソヴァンナ (17歳女子)

サイト II 難民キャンプを後にして、ソヴァンナ一家は転々と居所を変えた。母親は家庭内暴力を理由に何度も夫を変えた。母親は4人の子どもたちとポイペトにたどり着き、学校や寺院で寝泊りした。ソヴァンナはいつも懸命に働き、家族と過ごした楽しい思い出はひとつもない。ソヴァンナはポイペトで、両親を助けるため、カンボジアから国境のタイマーケットへ品物を運んだ。母親を手伝うため、小学校は3年生でやめた。母親のことは愛しているが、母親や自分たち子どもに暴力を振るう継父のことは憎んでいる。

ある日、近所の友達を訪ねると、ちょうど出かけようとしているところで、行き先を尋ねると友人は、「バンコクよ。月に4,500バーツも稼げるの。」と答えた。ソヴァンナは、その日友人を訪ねて運がよかったと思った。友人は、彼女をある男に紹介したが、あとで知ったのだがトラフィッカーだった。ソヴァンナと友人は男について国境のタイマーケットまで行ったが、そこで突然、男に車の中に押し込まれた。タイのトラフィッカーが車を運転し、そのあとオートバイに乗り換えさせられ、ある家に着いた。

家の中には大勢の少女たちがおり、それが買春宿だということがわかった。そののち3日間というものの、2人は客を相手にすることを強要された。友人は何とか売春宿を抜け出すことができ、カンボジアに戻り、警察に事の始終を告げてトラフィッカーたちを告発した。ソヴァンナも逃げ出そうと試みたが売春宿の主人に見つかり、連れ戻された。そののちも、何度も主人に脅されていたが、ぶたれそうになっているところを親切な隣人に助けられることもあった。

トラフィッカーとその一味はカンボジアで逮捕され、売春宿に監禁されていた少女たちは皆解放された。タイ人の男がソヴァンナを車で国境まで送ると申し出たが、カンボジアへの帰途、夕方暗くなると男はソヴァンナに性的暴行を加えた。彼女は逃げ出し、森をさまよったのち、車に乗せてもらいやつとの思いで国境までたどり着いた。

ソヴァンナが家に戻ると両親はおびえた。トラフィッカーから警察に何も告げるなど脅されていたのだ。そのためソヴァンナは、家から遠く離れた、あるNGOのセンターで

保護されている。まだ家には帰りたくないが、妹が最近、家から逃げ出したと聞き心配している。

<事例報告>

アン (17歳男子)

アンは、最近までクメール・ルージュ軍が駐留していたオダーミエンチェイ州で生まれた。彼の一家は小規模の農場を営んでいたが、子どもたちすべてを養うためには食料は十分ではなかった。父親は地雷を踏んで死亡、そののち母親は再婚。アンは新しい父親は好きでなかった。一家は隣人たちに多額の借金があったが、その金額については知らない。

一家にはお金がなかったので、就学経験はない。90年代の初頭、政情は不安定で、一家はクメール・ルージュ軍と国軍との戦闘を避け、居所を転々としなければならなかった。アンの記憶では、継父はしばしば彼を殴り、子どもたちに言葉の暴力を振るった。

8歳のときアンは家を出た。まず、シソポンへ行き、次にシェムリアップ、ポイペトと移動した。ポイペトでは国境でポーターとして働いたが、ある女が彼に近づき、一緒に来ないかと誘った。そこで、彼女のもとで数ヶ月間住み、一緒に国境のマーケットで野菜や食料雑貨を売った。彼女は優しくしてくれたが、ある日、彼を他の女に引き渡し、引き換えに2,000 バーツ受け取るとひとりで家に帰ってしまった。アンは、自分がトラフィッカーに売られたのだと知ったが、タイの生活がどんなものかも見てみたかった。

女のトラフィッカーは彼をバンコクに連れて行き、物乞いとして働かせた。日に30～60 バーツ稼いだが、すべて取り上げられた。それが嫌で一年後、女のところから逃げ出し他の子どもとともに路上生活を始めた。それからというもの路上での生活が始まり、合計で8年になった。ヤマ（覚せい剤の一種）を使うことも覚え、街のギャングとけんかしたり、服、靴、テープレコーダー、財布など手当たり次第に盗んだりした。時折ホームシックにかかり、永い間ホームレスの身でいることを悲しく思うこともあった。そんなときは、すべて忘れるために麻薬やストリート・ガールとのセックスにおぼれた。

アンはポイペトで、あるNGOのリハビリプログラムを終了したのち、「若者の家」にやってきた。薬物中毒からの回復も果たし、小学校の2年生に入学した。一度も通った事のない学校に通うのが夢だったのだが、ほどなくやめてしまった。音楽を学びたいというので、伝統音楽を教えるNGOに通ったが、またしばらくするとやめてしまった。そののち、大工仕事を修行中の友人についていくようになった。アンは小さい子どもの

ような話し方をする。歌を歌うのが好きだが、気が短く、他の少年とけんかや口論をしたりすることもしばしばある。友人は多くない。アンは自分を人と違った変わり者だと思ひ、それを恥じている。大工仕事を身につけたら自立したいと思っている。

トラフィッカーは、特にポイペトのような国境の街では、地元の人々や当局に比較的に知られている。そういった場所では、多くの社会問題のみならず腐敗も存在する。トラフィッカーたちは、うまく組織化され、利益が得られるようなネットワークを持つ。暴力団、買春宿の主人、警察、軍隊などとさえつながりを持ち、カンボジアからタイに至る犯罪組織を形成している。越境に際して不正ルートを手引きするようなガイドもたくさん抱え、トラフィッキング被害者のなかには、荷物担ぎ、品物、観光客やら物乞いで始終ごった返している国境のゲートを潜り抜けていくよう、彼らに指南されたものもいる。また、森、農場やパイナップル畑を抜けてタイにたどり着くものもいる。時には、子ども自身や、その家族が自ら移民し、トラフィッカーに近づく（脚注 12）。以下に示す事例報告はその母親がトラフィッキングに直接関与していた少女の話である。

<事例報告>

ニー（15歳女子）

ニーの母親は現在、子どもをタイへトラフィッキングした罪で、刑務所で懲役3年の刑に服している。ニーは、自分の母親が罪を犯したとは思っておらず、母親はただ貧しい子どもや家族を、金を稼ぐためにタイへ送ってやりたかっただけだ、という。

ニーは母親のことは大好きだというが、一緒に暮らしていて幸せに思ったことはない。母親に優しくされるどころか、ひどいののしりの言葉や暴力を受けていた。母親の再婚相手の男は、母親に暴力を振るっていた。かつては一年生として学校にも通っていたが、母親が逮捕されたのちやめてしまった。

ニー自身も三度、タイにトラフィッキングされた。最初は14歳のときで、パタヤに行った。借金のある母親を助けたかっただのとポイペトよりもよい暮らしができるかもしれないと思ったからだ。トラフィッカーは母親に2,000 バーツを渡した。パタヤでは路上やビーチ、ホテル、ナイトクラブなどで、キャンディーや花を売った。時にはわざとみすぼらしい服を着て路上に座り、外国人に物乞いをした。いつも午後5時から夜中の12時まで働き、日に2,000~3,000 バーツというよい稼ぎを得、トラフィッカーから小遣いももらっていた。トラフィッカーはいつもニーがちゃんと働いているか見張っていた。プーケットやバンコクでも同じことをさせられたが、かわいらしい容姿の彼女の稼ぎはいつもよかった。

¹² Panudda B. and June K. 'Trafficking of Children: The problem and responses worldwide'

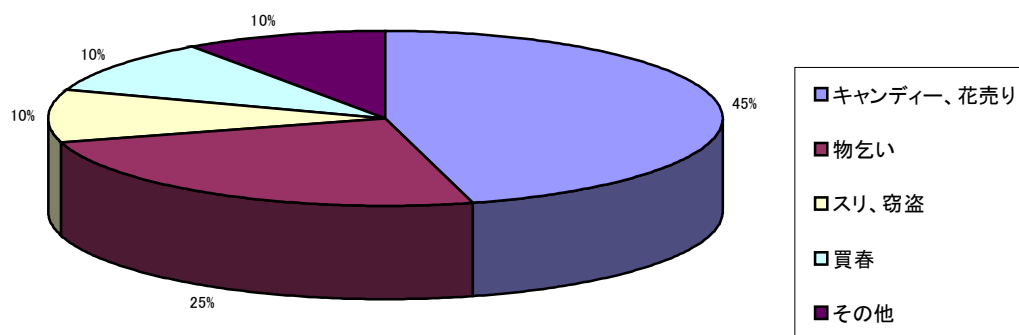
ニーはタイの警察に逮捕されカンボジアに戻ったが、再び、継父にいわれるまま、別のトラフィッカーを通じバンコクに行った。継父から逃れたかったのと、服役中の母親の保釈金を稼ぎたかったからである。タイでの仕事は好きではなかったが、家計を支えているのだという責任感があった。時にトラフィッカーたちに脅されもしたが、暴力を振るわれることはなかった。

現在、ニーは「若者の家」に居住し、小学2年生として勉強している。また、美容師になる訓練も始めた。現在の生活には満足しているが、母親が恋しいし、彼女が刑務所にいることを思うと胸が痛む。保釈金を積み出所できると聞いたが、継父が家や土地を売り払ってしまったと知り、その希望もなくなってしまった。妹や弟が継父に放棄されていないかと心配である。一番年下の赤ん坊は母親とともに刑務所にいる。ニーはあまり過去のことや母親のことで思いつめないようにしている。将来は、美容院を営み、母親と一緒に暮らしたいと思っている。

3.2 苦悩の日々

タイに行き着いた少年少女は、通常劣悪な環境下での生活を強いられる。子どもや青少年の行き着く先として多いのは、パタヤ、バンコク、プーケット、アランヤプラテート、ホアヒンの順である。そういった場所では地元の人や外国人観光客が、都市やリゾートの歓楽街で遊興する。図表 C は、タイで子どもたちがよくさせられる仕事を示したものである。花・キャンディー売り：45%、物乞い：25%で、これらは最も割りのよい仕事である。農場や建設現場で働く者はあまりいない。トラフィッカー同士のネットワークは非常によく発達しており、簡単に子どもたちや若者に仕事をあてがうことができる。

図表 C: タイでの仕事



3.2.1 トラフィック・チルドレンの運命

バンコクに送られる子どものほとんどは、人々の同情を集めやすい、幼児か障害を持つ者である。そうした子どものほとんどが、家族の年上の者に連れられて行くか、もしくはタイのマフィア組織の手で売り飛ばされ、悲惨な状況のもと酷使される。バンコクにトラフィッキングされた男子の2人から以下の証言を得た。

「トラフィッカーに注射されて障害者になった友人を知っている。」

パタヤ、プーケット、ホアヒンなどのビーチリゾートは、観光と風俗産業が結びついて栄えており、若者は性的搾取の危険にさらされる。買春宿に直接売り飛ばされる子どもたちもいれば、非間接的な路上ベースの売春に従事することになる子どもたちもいる。彼らは最初、路上、レストラン、ナイトクラブやビーチで花やキャンディーを売ったり、上客の見つかるようなバーで接客をしたりする。いずれの場合も、小児性愛者の目にかなうや、性的虐待を受けたり、体を提供することを強要されたりする。このように、最初は手伝い的な仕事や接客から始まり、次第に買春にひきこまれるケースが多い。

<事例報告>

ロック（19歳男子）

サイトII 難民キャンプの出身。一家は、カンボジアに送還され、そののち父親が慢性疾患で死亡してから暮らし向きが変わる。母親は野菜を育て、日用雑貨品を売り始めるが、十分な収入を得られなかった。ロックには7人の兄弟姉妹がいたが、誰も家計を支えるに足る安定した職に就いていなかった。母親は、自分の子どもたちの居場所はおろか生死についてもすべて把握しておらず、2~3名は死亡したのではないかと述べている。ロックの知るところでは、母親は村人に1,000~2,000バーツの借金があった。村の中心からかなり外れたところに小さな家を持っていた。

ロックは就学経験がなく、母親が多忙だったのでよく姉のところ泊まりに行っていた。姉の家では、少年たちがたむろし、一日じゅう、タバコ、ギャンブル、そしてヤマに耽っていた。ロックも少年たちにヤマを貰ったことがある。姉やその夫とはよく口論になった。しばしば国境のタイマーケットに仕事を探しに出かけた。

10歳のとき、初めてタイにトラフィッキングされた。友人からタイの生活について聞いていたので、恐れは全くなかった。以来、タイ行きを何度も繰り返した。一人でタイに行ったとき、ある外国人の男性と知り合い、パタヤのコンドミニアムと一緒に住むかと誘われた。外国人男性は、ロックに携帯電話を与え、日に1,500バーツをくれた。そ

の男性とセックスをしなくてはならなかったが、それ以外は何もしなくてよかった。男性が仕事で出かけ、パタヤにいないときには自由になる時間が沢山あった。同じ敷地内のマンションには、ロックのように外国人に囲われているカンボジアの少年が多くいた。少女も見かけた。

パタヤでの生活は楽しかった。友人と遊びに出かけ、ヤマを買って部屋で使用したり、買春宿に出かけたりもした。時に、彼を囲っていた外国人男性に連れられ、ビーチやナイトクラブに出かけた。美しいビーチ、タイのポピュラーソング、ハンバーガー、ピザ、少女たち、故郷では見た事のないものばかりで、ロックはそれらを満喫した。外国人男性は、ロックを傷つけることはなかった。彼は、ロックに優しく、ロックも彼が好きだった。ロックはその男性が自分を愛してくれていると思った。タバコやヤマにかなりの金を使った。ポイペトの母親の元にも何がしか送金した。家族を恋しく思うこともあり、2~3ヶ月に一度家に帰ったが、外国人男性はそれを許してくれた。不正ルートを知っていたため、国境を越えるのは容易だった。しかし、ある日部屋に友人といるところを警察に見つかり、全員が逮捕された。

「若者の家」に来た当初は、タイでの生活をとても懐かしく思った。最初の一ヶ月間は他のカンボジア人の少年たちと、一緒に過ごすことに違和感を覚えた。カンボジア語を忘れてしまっていたし、文化もタイでのそれとはかなり違っているように感じた。ロックはタイのポップスの歌本を大切に保管し、タイの俳優の写真を集め、タイのティーンエイジャーのような踊り方をする。ロックはタイでの出来事を話したがらず、時折少しは話してもすべてを話すわけではない。「若者の家」を訪ねてくる外国人には、親しみやすい笑顔で積極的に近づく。

ある日、2人の外国人がロックに面会に来た。彼らは、車で施設の敷地内に乗りつけ、図書室でコンピューターに向かっていたロックを発見した。昼の12時ごろのことで、施設の職員がほとんどいない時間であった。2人は自己紹介をした。一人は背の高い、頭の禿げ上がった男で、フィンランド出身と告げた。もう一人は、痩身に年配の白髪の男で、イギリス人だといったが、それがロックのかつてのパトロンだった。フィンランド人男性はロックの友人の相手だった。友人のほうは当惑していたが、ロックはイギリス人男性に抱きつき、始終彼の腰に手を回していた。

ロックのパトロンはタイ語、カンボジア語ともに流暢に話し、少年たちに「この生活は好きかい?」、「ポイペトにはいつ戻るのだね?」、「今晚、一緒に食事に出かけないかい?」などと、話しかけていた。ロックは、男性と一緒に出かけたがったのだが、ソーシャルワーカーから許可が出なかったのに腹を立て、彼女とはその後2週間、口を利こ

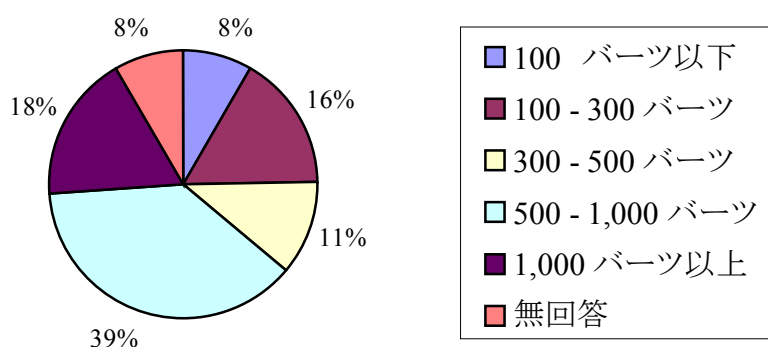
うとしなかった。この一件は、地方当局に通告され、外国人男性たちは再び訪ねてくることもなく、ロックは「若者の家」に留まった。しかし、友人のほうはその一年後いなくなり、ロックはパタヤのパトロンのもとへ戻ったに違いないという。

3.2.2 奴隷的な状況の下で

タイで働くあいだ、トラフィクト・チルドレンはトラフィッカーや売春宿の主人に服従させられ、過酷な労働条件と劣悪な生活環境を強いられる。耐え難く、一生悩まされるような状況にさらされるのだ。トラフィッカーや雇い主が借りた狭く不潔な空間で、5~6人が共同生活を営む。いうまでもなく必要な医療サービスも受けられない。十分な収入をあげることができるまで食べ物も満足に与えられないこともある。ある少女の証言によれば、食事は一日一食のみで常に腹をすかせていたという。

労働時間は、仕事の種類や割り当てられた場所により、まちまちである。物乞いは通常、朝から晩まで一日中、他の多くの者は夕方近くから翌朝まで働く。花やキャンディーを売るようにいわれた者は、タイのナイトライフを楽しむ観光客目当てに主に夜働く。ほとんどの子どもが、極めて長い時間の労働を強いられる。若者全体の80%が一日10時間以上働かねばならなかったと答えている。おそらく10~12時間が平均だろう。聞き取り調査を受けた子どもの72%が、タイでした仕事は好きでなかったと答えている。週末もなく、普通の子どものように楽しく毎日を送ることもできなかったのだ。たいていの場合、稼ぎはトラフィッカーや雇い主に全部取り上げられてしまっていた。図表Dで見られるように、たとえ稼ぎがよくても、小遣いを貰うか、自分の稼ぎを自由にできたのは、全体のわずか15%に過ぎない。

図表 D: 一日の収入



3.2.3 つらい経験

子どもの人権侵害は、これらのトラフィクト・チルドレンが行き着いたあらゆる所でなされているに違いない。多くの子どもたちから衝撃的な経験が報告され、トラフィッカーに精神的、肉体的虐待を受けていたことがわかった。いうまでもなく、そういった経験が子どもたちの精神衛生に及ぼす影響は多大で、感受性の発達を妨げとなっている。

稼ぎが十分でなかったり、トラフィッカーのことをきかなかったりすると、縄で縛られたり、棒で殴られたり、打ち据えられたりする。電気ショックなどのひどい体罰を与えられる者もある。トラフィッカーのもとで、常に暴力の脅威にさらされながら生きていかなければならない。少女、少年までもが、できるだけ多くの客をとり、また客によいサービスができるよう強壮剤や、性的刺激剤、薬剤を使用させられる。トラフィッキングをうまく完了させるために、トラフィッカーは被害者の子どもに暴力や拷問、性的暴行、脅迫などの手段で服従を誓わせ、支配力を保つ（脚注 13）。

<事例報告>

ダン（17歳男子）

ダンの両親はよく家でけんかしたが、ダンには両親のことが好きだった。彼は、いつも自分からすすんで、料理、水汲み、弟たちの世話をした。家計は苦しかったが他の隣人たちも同様でそれはごく当たり前のことだった。何度となく出入国を繰り返し、数え切れないほどタイへ出かけた。トラフィッカーと行くこともあったが、多くの場合は一人で出かけた。覚えているだけでも、警察には 50 回近く捕まったという。

ダンが初めてトラフィッカーとタイに出かけたのは、4 年前のことだ。プーケットに 3 年ほど滞在した。トラフィッカーはダンのほかに、3 人の男子と一緒に住むよう小さな家を借りた。家賃は月 2,500 バーツだったと思う。また、母親がトラフィッカーから 1,500 バーツ受け取ったことも知っている。弟も別のトラフィッカーに売られたので、両親は全部で 3,000 バーツ受け取った。彼にとって親の言うことを聞くのは当たり前のことだった。

当時両親は重い病に苦しみ、それ以外方法がなかったのだ。2 人ともダンがタイにいるあいだに死んでしまい、親の死に目にあうことはできなかった。隣人によると死因はエイズということだったが、彼はそのことは誰にも話したがない。

¹³Anti-Slavery International インターネットサイト: www.stophumantrafficking.org

プーケットにいる間は夕方 6 時から翌朝 6 時まで、キャンディーや花を売らされた。さらに、午後は 1 時から 5 時まで働かねばならず、休憩はおろか、食事をとる暇すらなかった。たいてい、日に 500~700 バーツの稼ぎがあったが、小遣いをもらったことはなかった。ダンはいつもトラフィッカーを恐れていた。ある日、花売りの職場を 30 分ほど離れ、友人とカードをして遊び、稼ぎのうち 50 バーツすってしまった。戻ったところをトラフィッカーが待ち構えていて、大きな木の棒で打たれた。頭に傷を受け、指は腫上がった。トラフィッカーのところから逃げ出したが、他に行く当てもなく、数日後自分から戻り、謝った。しばらくして警察に捕まり、家に戻って、一部始終を母親に告げた。もう二度とタイに行きたくないと言ったが、母親に我慢するよう説得され、またタイへ出かけた。そうするしかなかった。自分でパタヤに戻り、また花を売った。

パタヤではダンから 500 バーツという高額でバラの花をたくさん買ってくれる外国人もいた。そういった外国人の一人に道で再会し、ショッピングモールに出かけないかと誘われた。そこで指輪やネックレス、服を買ってもらった。別れ際、その外国人はダンに近くのホテルの部屋番号が書いてある紙切れを渡したが、それには近くのホテルの部屋番号が書いてあった。翌日、ダンホテルに彼を訪ねた。

現在ダンは「若者の家」に住んでいる。彼は両親も頼りにできる親戚もない彼は将来に希望が持てないという。一度は「若者の家」を抜け出して、パタヤに安易な金稼ぎに出かけ、つかの間の生活を楽しんだが、結局逮捕されてまた、「若者の家」に戻ってきた。いまだに時折、タイでの生活を懐かしく思ったりする。

さらに特筆すべき点として、多くの子どもたちがトラフィッカーから性的虐待や暴行を受けているという事実がある。トラフィッカーがその圧倒的に強い立場を利用して、被害者を脅かすのである。悪事を働くのはトラフィッカーに留まらない。トラフィッカーの配偶者、買春宿の主人、外国人観光客でさえもこうした弱者である被害者につけ込む。実際、被害者が真実を語るのをためらうため、どのくらいの被害の件数があるか明らかではない。しかし、今回の聞き取り調査では、表 6 や事例報告にもあるように、多くの若者が親にも話せないような痛々しい経験について語ってくれた。

表6 最も恐ろしかった経験や虐待のケース

虐待の種類	少年	少女	計
トラフィッカーによる暴行	13	8	21
ストリートギャングによる暴行、嫌がらせ	8	1	9
トラフィッカーによる脅し	2	2	4
警察や刑務所職員による体罰	3	1	4
トラフィッカーによる電気ショック	3	1	4
外国人による性的暴行	2	2	4
トラフィッカーに電気コードで繋がれた	2	1	3
トラフィッカーによる薬物の使用の強要	1	1	2
トラフィッカーによる性的いやがらせ	2	0	2
トラフィッカーに頭を水につけられた	0	1	1
トラフィッカーによる性的暴行	0	1	1
何もない	5	1	6
計	41	20	61

<事例報告>

ポック (16歳女子)

ポックはベトナムの出身。幼い時は母親は優しくよく面倒を見てくれた。父親はしばしば隣人といさかいを起こし刑務所に入れられた。食べものはじゅうぶんではなかったが、家族との慎ましやかな生活は幸せだった。しかし、あるベトナム人の女性と暮らすようになって以来つらい生活が始まった。ポックはその女性のことを「お母さん (里親)」と呼んでいたが、叔父によれば、実の母が彼女をその女性に売ったのだった。そのことを彼女は知らなかったが、父親がエイズで死んでからというもの生活は苦しくなる一方だった。

13歳のとき、初めてタイへ連れて行かれた。里親と称する女は、彼女の母親に、簡単に金になる方法があるので3ヶ月間、ポックをタイに働きに連れて行くといったのだ。タイにはじめて行ったときはとても怖かったとポックはいう。タイ語も話せず、自分が

いったいどこにいるかも判らなかつた。家族が恋しく、家族から遠く離れて非常に寂しかった。友人もできなかつた。ポックは、タイの生活に良い思い出はひとつもない。里親と一緒に生活した。まずバンコクへ行き、路上で物乞いをし、警察に捕まりカンボジアに送られた。里親は彼女が強制送還になる日を調べ、国境で待ち伏せをし、再びポックをタイへ連れて行った。

次の稼ぎ先はビーチリゾートのホアヒンだった。ポックは、たいてい夕方から深夜にかけて働いた。里親の女はポックに、ビーチやナイトクラブで売るためのキャンディーや花を山ほど渡した。歩き回ってそれらを売りさばき、日に 2,000~3,000 バーツ稼いだが、稼ぎはすべて女に取り上げられてしまった。里親の女はいつも、できるだけたくさん花やキャンディーを売るようポックを脅し、あまり売れない日にはひどく腹を立てた。その夫とともにポックの手足を縛り上げ、或る時などは、バケツの水に顔をつけられて溺れそうになった。ポックは里親らが憎いという。

客のほとんどは西洋人だった。ベトナム系のポックの顔つきは愛らしく、ホアヒンでは多くの外国人に好まれた。彼らはポックからキャンディーや花を買い、10 ドル以上も払ってくれた。ある者はポックを散歩に誘い、お金をくれた。胸を触ったり、スカートのなかに手を入れたりする者もあったが抵抗することもできなかつた。ナイトクラブには行きたくなかつたが、行かないと里親の女に殴られるので、いやいや出かけた。ある日、里親の女はある外国人と出かけるよう言いつけた。はじめは働きに行かなくても良いと思いうれしかったが、その外国人は彼女をホテルに連れて行き、そこで 5 日間一緒に過ごさねばならず怖かつた。ホアヒンでポックの友人の一人がエイズに感染していた。

ある日、具合が悪く家にいた。かわりに、里親の女がキャンディーや花を売りに出かけた。女の夫が看病するといつてポックに近づき、体中を触ってきた。叫んで、もみ合いになったが力が足りず、里親の女が戻るまで何度も性的暴行を受けた。女はポックと夫をひどくののしつた。働き出してから一年、とうとう里親から逃れる決心をし、ホアヒンを去りバンコクへ行った。バンコクの路上で警察に捕まり、カンボジアへ送られた。

「若者の家」に滞在中のある日、市場で里親の女に出会った。女は彼女の手をつかんだが、彼女は必死で抵抗し、まわりの人に助けられ、連れて行かれずにすんだ。女のことを憎んでいるとポックは繰り返し言う。

ポックは今、幸せそうに見える。彼女は美しい少女になったが、いまだ 5 歳の子どものように振舞う。よく泣き叫び、腹を立て、いつもはっきりしない口調で話をする。また、カンボジア語の習得が難しく、友人がからかって彼女のことをベトナム人と呼ぶと傷つ

く。ポックは、決してタイには戻りたくないという。そしてボーイフレンドなど絶対いらないといっている。

帰還の過程も、トラフィック・チルドレンの心の傷となりうる。トラフィック・チルドレンは非常に警察を恐れる。罪を犯した不法移民の扱いを受けるからだ。多くの警察官が不用意にも、子どもたちに体罰を与えてしまうことが報告されている。こういった子どもたちは、タイに不法滞在しているので警察から隠れ、おびえながら日々を過ごす。見つかったり、逮捕されたりする際に警察官に脅されたり、暴行されたりするケースが後をたたない。子どもたちが、「刑務所」と呼ぶ移民拘留センターでは、15歳以上の子どもは大人とみなされ、大人と同じ監房に入れられる。子どもと一緒につかまったトラフィッカーなどの犯罪人と同じ監房に入れられることも避けられず、そこでもまたさまざまな危険にさらされるのである。

3.2.4 危険な環境

さまざまな酷使、虐待に苦しめられるばかりでなく、被害者の少年たちはタイのストリートギャングとけんかし、殴られたり怪我をしたりする。時には、彼らのカモとなり、略奪されたり暴行されたりする。比較的年齢の高い少年たちは薬物を勧められ、覚せい剤の一種のヤマと呼ばれる薬物の常習者となる。薬物を用いれば、その後もっと働いたり、過酷な状況を我慢できたりするようになるのである。聞き取り調査を行なった14歳以上の若者のうち、ヤマの使用経験のある者は全体の四分の一であった。薬物依存症に苦しむケースもある。

「友人の一人がタイのギャングに殺された。前の晩のけんかの仕返しにやってきて、友人の頭を大きな棒で殴ったんだ。その晩、僕たちはシンナー2缶を吸って眠りこけていて、友人を助けることができなかった。」

こうした若者がいかにひどい目にあおうとも、彼らが愛情やケアを受けることはない。彼らは困難な状況に置かれ、家族、故郷からも遠く離れ、ホームシックや絶望、孤立感、抑うつなどに耐えねばならないのだ。調査対象61名のトラフィック・チルドレンのうち、20名がホームシックに悩み、37名がつらい思いをしたと答えている。

3.3 家庭の問題

なぜ子どもたちをトラフィッカーに渡したか問えば、すべての家族が「貧困と食糧不足」と答えるだろう。しかし、いくら「貧困」という言葉をもってしても、搾取被害者の受けた精神的ダメージを正当化したり説明したりすることはできない。タイでの労苦はもとより、タイへ行く前に子どもたちがすでに過酷な経験をしていたことが調査によってわかっ

た。本来は、子どもたちが、家族の愛を受けて育つ場であるべき家庭が、時として問題の根源となっていることがある。風俗業界で搾取にあった子どもの80%が、家庭内において心身への虐待を受けていたようだ。(脚注14)

3.3.1 崩壊した家庭

トラフィクト・チルドレンの多くは、その家庭的基盤が不安定である。聞き取り調査を受けた子どもたちのうち、70%は、子ども時代、家族との幸せな記憶を持っていないと答えている。夫をエイズで亡くし、未亡人を通す母親もあるが、再婚の場合、新しい父親が娘を強姦するという事例もある。父親に2人の妻があり、いつも口論が絶えない家もある。新しく迎えた妻が前妻とその子どもを追い出したというケースもあった。いちばんよくあるのは、親の一方、または両方がアルコール中毒で、毎日ギャンブルに耽っていたという事例である。いうまでもなく、そういった親たちは子どもの稼ぎを当てにし、子どもに家計の担い手としての役割を期待する。さらには、ESCAP アジア太平洋経済社会委員会が行なった調査によると、性的搾取を受けた子どものうちの半分は、トラフィッキングされる以前にすでに性的虐待を受けているという。

3.3.2 家庭内暴力

被害にあった子どもたちの多くが、環境の悪い家庭生活を過ごし、家族との問題を抱えていたことがわかった。あるトラフィッキング反対会議において、女性トラフィッキング被害者の30%が、タイへ行く前から家庭内暴力に苦しんでいたとの報告が女性省の大臣よりなされた。調査対象110名のトラフィクト・チルドレンおよびストリートチルドレンのうち約半数が、父親や母親の再婚相手がほぼ毎晩母親を殴り、時にはナイフや鉄の棒を使うのを目撃している。以下はある少年の証言である。

「母は父に殺された。ある晩、酒に酔った父が母の頭に斧を振り下ろしたのだ。僕は小さすぎて母を助けることができなかった。」

子どもたちは、子どもとして当然受けるべき十分な世話を受けるかわりに、実の親またはその配偶者によって不適切な労働へとかりだされ、ネグレクトされ、肉体的、性的、精神的虐待を受ける。若者との密接なインタビューによって、その半数が家庭にいるとき親から虐待、ネグレクト、或いはその両方をされていたと感じていることがわかった。全体のうち44%の子どもたちが親によってしばしば打ち据えられたり、脅されたり、ののしられたりしたといっている。45%は、愛情不足や親の怠慢を訴える。こういった子どもたちは、虐待や極度の貧困から逃れる必要があり、そうした家庭の問題が結果として子どもたちに心的外傷を与えていることは明らかである。

¹⁴ ECPAT International website: www.ecpat.net

<事例報告>

チューン（15歳男子）

タイに行く前は、プレイヴェイン州で母親、継父と3人の兄弟で住んでいた。人生で幸せだと感じたことは一度もなかったという。就学経験もなく、友達もほとんどいなかった。毎日、母親を手伝って家事を10時間ほどした。食べ物はいつも不足しており、家庭では暴力が絶えなかった。

ある日、兄から散歩に出ようと誘い出され、そのままバンコクに連れて行かれた。11歳のときだった。2ヶ月の間、一日中路上で物乞いをして日に500～800バーツ稼いだが、稼ぎは仕事もしていない兄に取り上げられた。夜はいつも路上で寝た。警察官や、兄、そしてシンナーを吸って凶暴になった街のギャングが怖かった。

チューンが家を去る一年前、実父はバットンバン州で首をつって死んだ。自殺の原因については知らない。母親が再婚してから家庭の様子が変わった。継父はいつも言葉の暴力をふるい、母親を殴った。あまりひどく殴るので母親の頭が割れてしまわないかと心配した程である。継父は子どもたちを怒鳴る事はあっても、殴ったことはなかった。そのかわりに母親がチューンと兄弟を殴った。時にひどく殴られて頭から血の出ることもあった。

現在チューンはあるNGOに保護されているが、他の子どもたちとは口をききたがらない。センターの年長の子どもが怖く、憎いのだと言う。村に親のいる子どもたちを見ると気持ちが落ち込むという。他の者に自分の過去を知られたくないとも言う。

NGO職員の観察では、チューンは他の少年たちとはかなり違っているという。センターで彼は問題行動を何度となく繰り返す。性的嫌がらせとなる言葉遣いをし、庭でマスターベーションをしたり、他の少年の性器に触れたり、少女たちにキスするなど、他の子どもたちが困るような事をしておもしろがる。最近、母親が亡くなり、チューンは弟や妹のことをとても心配している。家族とは4年近く会っていない。

3.4 社会心理的影響

3.4.1 トラフィッキング経験の影響

アザ、妊娠、性感染症や、エイズウイルス感染など、身体的苦痛とともに戻ってきた子どもたちには、当然適切な対処がなされねばならない。前述のように、トラフィクト・チルドレンや若者の多くが家庭でのまた、タイでの苦しい経験のために精神的問題を抱え

ており、こちらのほうもケアを必要とする。それらの影響で、短期もしくは一生にも及ぶほど長期にわたり、精神的なダメージを受ける。カンボジアに戻ってから、特に社会復帰をしようとしたとき、更にいくつかの困難に直面するということがも覚悟せねばならない。帰還後、こうした被害者は家庭に再統合されたり施設に保護されたりするのだが、残念なことにその後シェルターや家から逃げ出し、再びタイに行ったり路上生活を繰り返したりする子どもも少なくない。

一般に子どものストレスは、その子どもの性格や経験の厳しさの度合いによっていろいろな形で現れてくる（脚注 15）。絶え間ない虐待や恐ろしい経験は、子どもたちの感情や行動の障害として現れてくる。極端な孤独感や愛情の渇きも、子どもたちの心の発達の大きな阻害要因となる。表 7 は被害にあった若者の帰還後、シェルターにいる間に自身が感じる精神状態を示している。

表 7: 心の状況（若者の自己認識による）

種類	少年	少女	計
孤独	15	9	24
不安	15	5	20
憎悪	6	10	16
絶望	10	5	15
ホームシック	7	4	11
眠られない	6	1	7
恐怖	3	3	6
怒り	2	1	3

* 複数回答も含む

¹⁵ IOM (2002) A Study on the Situation of Cambodian Victims of Trafficking in Vietnam and Returned Victims of Trafficking from Vietnam to Cambodia Researched by SRDC

<事例報告>

ナラ（17歳男子）

ナラはカンボジアのコンポンチャム州生まれのベトナム人である。顔には敵意が表れており、いらいらして落ち着きなく辺りを見回す。聞き取り調査を受けている20分の間も、近くを通りかかった子どもたちに何度か怒鳴っていた。

ナラの一家は極度に貧しかった。家族8人のうち、誰ひとりとして家計を支えるような仕事にはついておらず、食べ物はいつも不足していた。親戚や兄弟の多くは、家を出て路上生活をしていたという。彼もそうした。

祖母にタイへ行こうと誘われたとき、ナラは13歳だった。祖母は、ナラとその甥をバンコクへ連れて行き、小さな家を借りたが、彼はそこでは暮らしたくなかったため、いつも家の外で寝ていたという。朝の7時から夜10時まで一日中働いた。毎日、路上やレストラン、バーを歩き回り、キャンディー、花、ライター、サングラス、テレホンカードを売った。一日の稼ぎは200～300バーツで、すべて祖母に渡した。あまり歩きすぎて足が痛くなることもしばしばだった。しばらくして、祖母、甥とともにカンボジアに戻ったが、家族を訪ねるや否や再度タイへ引き返した。家には食べるものも、なすべきこともなかったからだ。甥と2人で国境を越え、タイで路上生活をした。今度は、キャンディーや花を売る事に加え、ありとあらゆることをしなくてはならなかった。ヤマを売り、タイからカンボジアに密輸した。ナラ自身も薬物常習者になっていた。路上で生きていくためにはギャングとほぼ毎日けんかしなくてはならず、また、何度もタイの警察に捕まり、ひどく殴られた。

あまりにもひどい経験をしたので、それらについてはあまり思い出したくないという。ある日、甥がタイで「凶暴な集団」に出くわし、ひどい嫌がらせを受け、いさかいの挙句、注射をされて身体に障害が残ってしまった。別の折には、ナラが外国人観光客に何らかの性的暴行を加えられた。ホテルで、アナル・オーラルセックスを強要された。結局、通算2年間路上生活をし、その間何度も国境を越えて、ポイペト、バタンバン、プノンペンと移動した。

彼は時折、NGOの勉強会に参加しにやってくるが、このプログラムでは食べものが配布されないため不満だという。ホームシックを感じたことはなく、路上生活を続けていこうと思っている。自由にできる小銭のあるときは幸せで、なければ不幸だという。金が手に入ればいつもドラッグを買うという。

3.4.2 女子の陵辱

買春宿に売り飛ばされた女子の場合、事態は非常に深刻である。カンボジア内外で性的虐待、搾取にあった被害者の少女たちを支援する主要 NGO のひとつ、ワールド・ヴィジョンが、2000 年に行なった統計によると、保護された少女たちのうち 87.5% が、心的外傷後遺症など心の問題を抱えている。商業目的の性的搾取は、子どもの心身や社会道徳的発達において、一生続くまたは命をも脅かすような重大な影響をもたらさう。 (脚注 16) 買春宿で少女たちは日に 5~10 人の客を相手にしなくてはならない。客をとるのを拒めば、殴られたり、電気ショックなどで脅かされたりする。少女たちは身体的に成熟していないうちから、男の相手をさせられる。タイの風俗業界に売られたある少女の証言を示す。

「タイでのことを母に知られるのがいちばん怖い。売春婦として働いていたなどということを知られたくない。自分が恥ずかしい。」

彼女の母親はおそらくトラフィッカーに彼女を売ったか、貸したかしたのだろう。母親にタイでのことを聞かれても、彼女は決して本当のことは言わない。性的搾取で受けた心の傷は相当なものだろうが、それにも増して恥の意識が重くのしかかっている。カンボジアでは、少女は結婚まで純潔を守るとするのが通例で、売春婦はおろか、ボーイフレンドと性的関係を持った場合や、婦女暴行の被害者までもが、「キズモノ」として扱われる。そのため、こうした少女たちが以前家族とともに過ごした地域社会に戻ることは、極めて困難である。少女たちは、結婚相手を見つけることもできず、時に生涯売春婦として生きることを選ぶ。(脚注 17)

3.4.3 心的外傷とそれがひきおこす問題

青少年被害者たちや彼らの面倒を見る 50 人のソーシャルワーカーとの聞き取り調査から以下の兆候が引き出された。他の NGO に保護されている子どもや若者たちから精神状態についての情報を得ることは極めて困難だった。そこで、「若者の家」に居住する者について、詳細な観察をし、日々の行動や感情について評価することにした。臨床的試みではないが、これらの結果はトラフィッキング被害者を支援するうえで必要な留意点となり得るであろう。

問題行動

- 問題行動を繰り返す
- 日常生活をうまくこなせない

¹⁷ Yim P. 'CCPCR Addressing, the Sexual Exploitation of Girls IN CAMBODIA'

- 清潔の観念の欠落
- 子どもじみた依存的な行動
- 不適切な言葉の乱用
- 年上の子どもに対する過剰な服従
- 年下の者への脅しや暴行の傾向
- 感情を表現できない
- 頻繁な嘘
- 自己破壊的な行動
- 愚行、異常行動
- コミュニケーションスキルの不足と友人作りの不得手
- 大人や見知らぬ者に対する脅え、または逆に異常接近
- 勉強、掃除、入浴、洗濯、家事等、日常生活における極端な怠慢
- 薬物またはアルコール中毒
- 過度の喫煙
- 自殺願望
- 過度の性的行動
- 性的虐待、搾取への脆弱性
- 睡眠困難、悪夢
- 手首を切る、タバコの痕をつけるなど、自分のからだを傷つける習慣
- タイでの華やかな生活を懐かしむ
- シェルターからの逃亡や現実、安定した生活からの逃避傾向
- 言語、その他技能の習得が著しく遅い
- 暴力
- 犯罪に走る傾向

感情面での問題

- 忍耐力の欠如、短気、いらいら
- 欲求不満
- 攻撃的
- 責任感の欠如
- 怒り、敵意
- 自分本位、他人の意見を聞き入れない
- 他人に対する不信感
- 自信の欠如
- 情緒不安定、抑うつ、ストレス
- 孤独感

- 恐怖、不安
- 低い自己評価、自己の卑下
- 将来に対する絶望、自暴自棄
- 強度のホームシックや、家族に対する過度の心配
- 家族、親の再婚相手などの保護者に対する憎悪
- 恥や罪の意識
- 帰宅、帰郷への恐れ
- 純潔をなくしたことからくる親や故郷に対しての恥の意識
- 生活に対する不満足
- 反社会的態度
- 性に対するゆがんだ考え方
- 自分の名、年齢、出生地や母親の顔を知らないなど、アイデンティティの喪失
- カンボジア社会、文化に対する不適応

上に挙げた点から、子どもたちは以前にも増して脆く、再度トラフィッキングの被害にあう危険にさらされている事は明らかである。「若者の家」の四分の一の子どもたちが、入居時、本調査、そして日常生活の際など、毎回それぞれ別個の、一貫性を欠くとも取れる話をしたことは注目すべき点でもある。子どもたちは精神的に不安定で、人に話せないようなことを数々経験しているものと思われる。ある心理学者は、こうした心の問題が克服されなければ、将来自分の子どもたちや伴侶に、自分と同じ精神的苦痛を与えかねないと指摘している。そのため適切な心のケアが必須であり、重要優先課題として取り扱われるべきであろう。

<事例報告>

チャンテュ (16歳男子)

チャンテュとは孤児院でつけられた名で、自分の本名を知らない。家を離れたのは4歳のときで、幼い時の記憶はあまりない。タイとの国境にある難民キャンプで出生したが、一家はポイペトに送還された。家計を支えていたのは母親だった。兵士の父親は、いつも母親を殴ったりののしったりしていたので、チャンテュは父親が母親を愛していたと考えたことはない。

4歳のとき一家はバンコクへ移住したが、生活は一向に楽にならなかった。それどころかよい仕事も見つからず、家計はますます苦しくなった。両親は毎日口論を繰り返し、ほどなく離婚した。その直後、チャンテュは家を出た。一人で歩いていると、あるタイ人の男性に声をかけられ、大きな家で一緒に住まないかと聞かれた。そこで家までつい

ていった。

彼はそのタイ人の男性と住み始めたが、彼はとても親切で小学校にも通わせてもらった。小遣いも沢山くれたが、チャンテュには悪い友達が多く、ヤマ、マリファナやヘロインなどの薬物に使ってしまった。ヤマを売ったこともある。7歳のときに初めて麻薬を経験した。5、6年は安穏とした生活が続いたが、チャンテュが学校で問題を起こすと、同居していた男性は彼を孤児院へ送ってしまった。それから孤児院の職員が彼をカンボジアに送り返した。

ここに、チャンテュのもうひとつの話を紹介する。

チャンテュは、クメール・ルージュと国軍の闘争のさなか、家族と離れ離れになった。家族を探しにタイへ行ったが、家族は見つからず、ストリート・チャイルドとなって、ギャングの一味に加わり、仲間とともにバンコク、パタヤ、そしてプーケットへと移動した。仲間はタイ人で、彼らとはタイ語で話し、カンボジア語は一切使わなかった。

靴磨き、物乞い、スリなどをして、朝から晩まで一生懸命働いた。日に2,000～3,000バーツの稼ぎがあり、稼いだ金はすべて自分の自由にすることができた。仕事は好きではなかったが、ビーチやにぎわったストリート、華やかな夜の繁華街などが物珍しく心を奪われた。時にギャングの仲間に服従しなくてはならず、犯罪と知りつつ罪を犯したこともあった。小さなカッターを使ってスリをするテクニックを身につけた。良い稼ぎになった。しばしばギャングの少年たちと、路上でけんかをし、棒やナイフで脅された。ストリート仲間からセックスを覚え、買春宿に足を運んだ。ストリートでは自分の思うようにすることができ、そこには自由があった。しかし、友人がトラフィッカーによって、身体傷害にされたり、性的暴行を受けたりしたという話を聞くにつけ恐ろしく思った。ホームシックになり、気がふさぐこともしばしばあった。シンナーやヤマはつらい生活を忘れてくれさせた。

タイ警察には何度も捕まり、棒やベルトでたたかれたり、銃で脅された。刑務所に入られると、そこで年上のギャングの少年たちと一緒にになり、けんかになったり脅されたりした。

カンボジアに送還になったときには、タイ語しか話せなかった。カンボジアの読み書きを習った事がなく、最初はとても難しかった。そんな自分を恥ずかしく思い、シェルターではいつも一人でいた。しばらくして友人と打ち解け始め、言葉も少しずつ解るようになってきた。一年後、小学校の二年生に入学した。年下の子どもたちと一緒に学ぶの

は居心地の良いものでなく、何度も学校をさぼったり、ストリートチルドレンのような汚い格好をしたり、小さな子どもを威嚇したりした。チャンテュはしばしば機嫌が悪くなる。そんな時は、他の友達から離れ、伏し目がちになり、暴力的になる。友達とカラオケや買春宿に出かけることも時折ある。

チャンテュは新年や盆休みが好きでない。他の子どものように家族を訪ねたりすることができないからである。聞かれるたびごとにチャンテュの口からは違う話が出てくる。あるときは、自分は混血だといい、別の時にはタイで生まれたという。家族や故郷のことは話したがらない。嫌な気持ちになるからだ。他の子ども同様、「家が恋しい」彼に出身を尋ねるのはタブーだ。「バンコクに家がある。そこで、叔父さんが僕を待っている。」などと皆に話したりもしている。チャンテュは両親がすでに死亡していると信じこもうとしている。家族のことについてはほとんど記憶がないからだ。夢は彼の「故郷」であるタイに行って、平穏に暮らすことだという。

<事例報告>

スレイ (17歳男子)

難民キャンプで生活していた頃は一家の状況はそれほど悪くはなかったという。父親が自殺してから、苦しい生活が始まった。父親は、母親の妹と心中したのだが、スレイは、二人が自爆するのを目の当たりにしてしまった。母親は4人の子どもをつれてカンボジアに帰還し、プルサット州に落ち着いた。仕事はなく、食べることすら困難であった。スレイが学校に通ったことはない。

ある日、近所に住んでいた女がやって来て、「プノンペンの水祭りに行きたいかい？」と彼を誘った。女についていき、それ以来家族と離れ離れになった。プノンペンでは、最初、川辺の橋の下に住んだ。ケーキを売って生計を立てた。女には大工の夫がいたが、その前妻の脅しから逃れるために、彼らはスレイをつれて頻繁に動き回った。それからカンダル州に移った。しばらくしてプルサット州に戻ったが、実の母親や兄弟姉妹たちはすでに立ち去ってしまっており、会う事はできなかった。女とは、彼女がスレイをベトナム人のトラフィッカーに貸し出すまで、3~4年生活した。

最初と二度目はバンコクへ行った。4、5人の大人たちとその子どもたちと一緒にだった。パパイヤ畑から国境を越えたところでタイのトラフィッカーが待ち受けていたのを感じている。三度目はトラフィッカーとパタヤへ到着した。レストランやナイトクラブで外国人にキャンディーを売るため、朝の6時から真夜中、時には早朝まで働かされたが、それは他のカンボジア人の子どもたちも同じだった。ホテルの一室で10名ほどのカン

ボジア人の子どもたちと一緒に住んだ。稼ぎが悪いとトラフィッカーが腹を立てるので、いつも脅えていた。パタヤでは一日に 500~1,500 バーツ稼いだが、すべてトラフィッカーに取り上げられた。スレイは、「家が恋しかったが、<里親のお母さん>を支えるため、我慢しなければならなかったんだ。」と言う。

あるとき、パタヤのトラフィッカーを逃れて他の少年とバンコクに行った。そこでゴミ拾いをして、一日 50~60 バーツ稼いだ。4~5 ヶ月もすると 300 バーツ貯め、プルサット州にいる「里親」の女のところへ戻り、ケーキ売りの手伝いをした。3、4 ヶ月のうち、友人とポイペトへ行った。ゴミ集めをしている男のもとにしばらく身を寄せたのち、バンコクへ出た。金を稼いで実の母を捜したかったのだ。

「若者の家」に保護されたのちでさえ、彼は「母さんに会いたい。」といい続けた。木彫りの技術訓練を始め、小学校の第二学年で識字教育も受けている。「若者の家」での生活を楽しんでいるように見えたが、3 ヶ月後、突然友人と、2 台の自転車とともにいなくなってしまった。ソーシャルワーカーが、ポイペトで彼らを探し、運良く NGO センターに保護されているところを発見した。「若者の家」を抜け出したのは、タイに行って母親を見つけるための金を稼ぎたかったからだという。幸いにも、警察に見つかり、うまくいかなかった。「若者の家」に戻ることに同意し、ソーシャルワーカーとともに帰ってきた。

それ以来、スレイはできるだけソーシャルワーカーと一緒にいたがる。きっと息子を探しに来た母親のように感じたのだろう。ソーシャルワーカーに勧められて、以前は行きたがらなかった学校にも通うようになった。すぐにクラスで成績が 2 番になり、学級委員長にも任命された。

しかし 2 ヶ月後、スレイは心的外傷と自分自身の闘いにもがき苦しむことになった。突然、訓練や学校に行くのをやめ何もしなくなった。テレビの前で見るともなく過ごしたり、一日中ゲームセンターに入り浸ったりした。ある日は職員に暴力を振るったかと思うと、別の日には一人きりで部屋で泣いていた。まっすぐ他人を見ることができなくなった。「どうしてだかわからないが、何もやる気になれないのだ。」と言い続けた。何度も母親を恋しがるので、職員が彼を連れてプルサットやカンダル州に数度足を運んで家族を探した。ついに母親らしき人物を知る医師と出会ったが、その女性は最近 3 人の娘を残し、エイズで亡くなったという。それが、彼の母親かどうか証拠はなかったが、スレイはそれが自分の母親ですでに亡くなったのだという事実を自分なりに受けとめた。

しばらくの間スレイは訓練や識字教育をさぼったが、毎日たくさんの絵を書いた。それ

以外は何もしなかった。そして若者の家を出て、美術工芸訓練センターに自ら行く決心をした。そのセンターはとても小さく生活条件は良くなかった。子どもたちは朝から晩まで一生懸命働かねばならなかった。自分を変えたいと思ったスレイの決心は固く、若者の家を出てセンターに移った。栄養も十分でなく軽い病を患ったが、それでも3ヶ月間、懸命に努力した。そしてついにまた、自分の家に戻るかのごとく「若者の家」に帰ってきた。現在、スレイはある NGO のセンターで水彩画の勉強をしている。彼自身、とても楽しんでいるようで進歩も早い。今では妹が恋しいといい、母親のことは一切口に出さないようになった。今は毎日スレイに笑顔が見られる。

3.5 社会への再統合の難しさ、制約

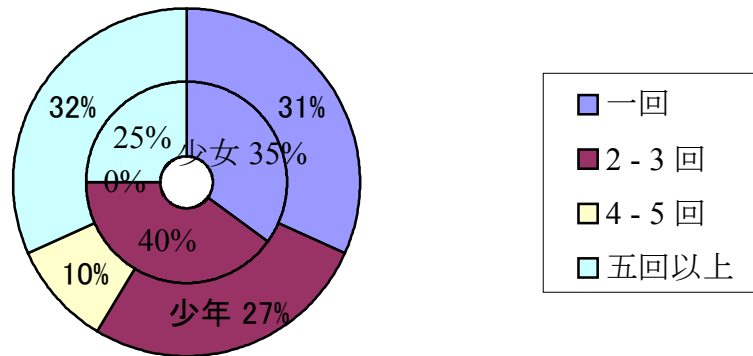
3.5.1 再トラフィッキングの危険

多くの政府、非政府機関の多大な努力にもかかわらず、ますますたくさん子どもや若者がタイへ何度もトラフィッキングされている。IOM 調査によると、政府や NGO のセンターに保護されている子どものうちの 56% は再トラフィッキングの経験がある。特にティーンエイジャーは国境を越えることや、タイの生活に慣れてくると、自らの意思で何度もタイに出かけるようになる。貧困から逃れ、良い暮らしがしたいという希望を持って出かける若者もいる。また、家庭内の揉め事から逃げ出すために出かける者もいる。さらには家計を助け、家族を助けるための義務感を示す子どもも多い。

また、全く違った世界にひきつけられ、都会の安易な生活を楽しみ、良い稼ぎを得ようとしていく者もいる。インタビューをうけた若者の 26% が越境ルートを知っていた。実際のところ、「若者の家」在住のトラフィクト・チルドレンの五分之一は、一度は「若者の家」を抜け出したことがある。経験の多い者ほど、自ら移住しようとする。はじめは脅されてトラフィッキングされても、他に方法がないとわかると自ら耐えがたい立場に留まるようになる（脚注 18）。タイから戻った仲間からの圧力もまた若者を越境に駆り立てる大きな要因となっている。図表 E は、若者が再びトラフィッキングされる率の高さを端的に示している。

¹⁸ ILO-IPEC インターネットサイト: www.ilo.org

図表 E: タイへの越境回数



3.5.2 心のケアや熟練職員の不足

こういった重大な事実にもかかわらず、調査の中で、子どもの心的外傷を認識し、シェルター内で専門カウンセラーによる十分な治療を与えている NGO は、わずか2つしかないことがわかった。また、ほとんどのシェルターや長期センターでは、心的外傷を受けた子どもや若者のケアをする事のできる有能なソーシャルワーカーが不足している。子どもたちに規律や助言を与えるいわゆる経験豊富なソーシャルワーカーには多数出会ったが、それと心理的なカウンセリングは別のものである。カウンセリングにあたるものの多くは専門家でもなければ、十分な訓練も受けていなかった。

更に、長引いた内戦や極度の貧困に苦しみ傷ついたカンボジア人は数知れず、そうしたなかでトラフィッキング被害者の子どもの問題にじゅうぶんに気もちが行き届かないのは、ごく当たり前のことともいえる。

4 結論ならびに提言

4.1 結論

今回の調査で収集、分析した情報の要約を以下に示す。ポイペトのような国境の街に見られるよう、カンボジアの大多数の人々は、安定した職もなく、非常に水準の低い生活に耐え忍んでいる。タイとの国境付近では、毎日何千という子どもや大人が、重い荷物を担いだり、路上で物乞いをしたり、不正に国境を越えたりしている。もっとよい職にありつけるといって希望を持って、人々は国境を越えトラフィッキングされる。貧困は、子どもを弱い立場に追い込みトラフィッキングの被害者を作り出す。

ほとんどの子どもたちは、村で比較的良好に知られたトラフィッカーに貸し出されたり売

られたりする。タイでどのような場所に行き着こうとも、子どもたちは耐え難い状況に置かれる。トラフィック・チルドレンの90%は、路上での物乞いや、ビーチ、ナイトクラブなど人の集るところでの花やキャンディー売りを強いられる。仕事の合間には、他の子どもたちと小さな部屋に閉じ込められ、劣悪な生活環境を余儀なくされ、できるだけ長い時間の労働をしなくてはならない。稼ぎはすべてトラフィックターに取り上げられる。子どもたちは奴隷のように働くしかない上に、さまざまな脅威にさらされる。トラフィックターは、他に頼るべき大人のいない子どもにつけ込み、心身の虐待による恐怖を与えることにより子どもたちを支配する。トラフィックターや外国人観光客による、少年少女に対する性的虐待、暴行もあとをたたない。それに加え、子どもたちは無慈悲な警察官や薬づけになった街のギャングからも脅かされている。こういった困難のため、子どもたちはタイにいる間、ひどいホームシック、孤独感や抑うつ症などに見舞われやすい。

聞き取り調査をおこなった被害者の若者は、遠慮がちに、またはきっぱりと自分の家族や家庭の問題に対する気持ちを示してくれた。多くのものが家族から十分に構ってもらったり、愛情を受けたりすることもなく、無理矢理働かされ、ネグレクトされ、最悪の場合には虐待を受けていた。また、すさまじい家庭内暴力を目の当たりにせねばならなかった。

要約すれば、これらタイのみならず、家庭内での経験が子どもたちの精神的な成長の面で重大な影響を及ぼしていることはまぎれもない。従って、社会心理学的な配慮が必要であり、被害者が社会への再統合を目指す際にそれは必ず生きてくるはずである。しかし、現実問題として、被害者の心的外傷や細心の心配りを要する問題に対応できるような心理的ケアを行える力量を備えたソーシャルワーカーの数は決して十分とはいえない。

4.2 提言

4.2.1 心のリハビリ、社会性の発達

被害にあった子どもや若者が、社会復帰を果たす前に、安全で信頼の置ける環境で十分な精神的支援を受けながら、相当期間のリハビリを受けることは大変重要である。彼らは、長期にわたり社会から排除され、方向性を失ってしまっており、不安定な状況におかれている。いったん帰還となれば、子どもたちは食べるもの、住む場所、医療保健サービス、教育、職業訓練を受けることができる。しかし、多くの場合、彼らは心的外傷もいえないままにサービスを受けるため、こうしたサービスの意味をよく理解できず、従ってその効果が十分発揮されないことが多い。結果的にタイに戻っていく子どもたちも後を絶たない。

こういった観点から、既存の一般的プログラムに加え以下のアプローチが薦められる。

なお、社会への再統合を成功させるためには、被害者を長期的に支援することが不可欠である。

- 個別、グループでの心のケアの提供：被害者の子どもや若者が、心的外傷を癒し、またはそれをどのように受け入れていくかを学ぶ。
- 自主的なグループ活動とチームビルディングの訓練：子どもや若者たちの自主性と自信、アイデンティティを回復させ、また他人と感情を分かち合うことで他者との共存を理解する。
- 被害者に対する社会的スキル回復の支援：例えば、日常生活をどのようにこなすか、仲間とどのように一緒に働くか、どのように文化を享受するか、将来をどのように思い描き、それを実現するかなどについての指針を示し、支援してゆく。それにより、精神的な安定と市民として社会生活を送っていきけるような前向きな態度を今後保持していくことができる。

4.2.2 ソーシャルワーカーの訓練

カンボジアでは、心理的なカウンセリングの通念があまり確立していない。このような事実を鑑み、シェルターで働くソーシャルワーカーに、さまざまな痛みを抱える被害者の子どもたちを支援できるような技量が備わるよう、教育、訓練をすることがますます必要になってくることは明らかである。

さまざまなシェルターで子どもたちを観察するなかで、心的外傷を負った子どもたちを、ずっと同じ場所で治療し、ケアをし続けるのが必ずしも最良の方法ではないということがわかった。たとえば、専門的な心理学の知識はなくとも、子どもを元気に励ましてくれる母親的なソーシャルワーカーのそばにいるほうが、子どもの顔は明るく見えた。特に精神ケアの場合、必ずしも西洋的なシステムが状況に即すというわけではなく、カンボジアの文化・背景を十分考慮に入れることは極めて重要である。

4.3 将来に向けて - 被害者の若者の能力養成

カンボジアでも他の東南アジア諸国同様、若者が人口全体に占める比率が高くなってきている。それにもかかわらず、国家がこの事実を十分認識し、高い能力と生産性を秘めた若者の潜在価値を評価しているとは言い難い。

主要関係機関では「子どもの参加」に重点が置かれ、大々的に実施されている。例えば、エクパット人材開発部は、アジアにおける子どもや若者に対する性的虐待、性的搾取撲滅プログラムを実行し、若者の成長に主眼をおいた地域援助の体制作りを焦点を当てている。

若者をこうしたプロジェクトに携わる仲間として参加させる方法にはさまざまなものがある。被害者である若者のリハビリや再統合の過程で、地域社会への再統合ということを最優先課題とした若者の能力を育成するような実践的方法が勧められる。

しかし現在のところ地域社会や家族の側に、帰還した子どもたちや若者を支援する十分な体制は整っていない。そこで、かつては被害者であった若者を、地域社会におけるモデルとなるよう訓練することを強く提言したい。そうした若者こそが、故郷で子どもたちの直面する問題に上手く対応することができるであろうし、自ら地域の状況や必要を見だし、支援体制を備えた地域社会作りに積極的に貢献してくれるだろう。

若者を実際の活動に積極的に巻き込むことが、彼らの自信回復につながるとともに、社会に対する責任感の意識をもたせ、ひいては彼ら自身の人間的な発展につながっていくと考えられる。子どもや若者が最大限に力を発揮できる形で、その可能性をひき出していく。この挑戦は、できるだけ多くのシェルター等でも試みられるべきであろう。言葉を変えていうならば、人々は彼らの潜在的な可能性に気づき、子どもや若者を被害者としてではなく、将来の支援者となる仲間として認識し、社会を担う若いリーダーとしての役割を与えるよう導いていかねばならない。

5 おわりに

子どものトラフィッキングは、実に複雑な問題である。それをひきおこす背景はさまざま、経済的、社会的、文化的、政治的、法的要因が単独で、または複雑に絡み合い、繊細で微妙な状況を作り出す。今回の調査で、現在おこなわれている支援のプログラムと実際の根源的なニーズの間にずれがあることが明らかにされた。トラフィッキング被害者支援をより有効なものにするため、こうしたずれを質的に是正するよう、徹底的に対処がなされなければならない。KnKは、カンボジアの危険にさらされた若者を支援するNGOのひとつとして、子どもや若者の価値ある成長を促す支援プログラムを強化し、個別的にも包括的にもよりよいものとして構築してゆくことに邁進する所存である。

用語集

バーツ	タイ通貨。1 US ドルはおよそ 40 バーツ。
CNCC	Cambodia National Council of Children カンボジア子ども評議会
CWCC	Cambodian Women's Crisis Center
ECPAT	End Child Prostitution, Abuse and Torture エクパット、ストップ子ども買春、虐待
ESCAP	Economic and Social Commission for Asia and the Pacific アジア太平洋経済社会委員会
IDC	Immigration Detention Center 入国管理局収容施設
IOM	International Organization of Migration 国際移住機関
KnK	Kokkyo naki Kodomotachi 国境なき子どもたち
MOU	Memorandum of Understanding 覚書
MOSALVY	Ministry of Social Affairs, Labour, Vocational Training and Youth Rehabilitation 社会福祉労働省
MWVA	Ministry of Women's and Veterans' Affairs 女性・退役軍人問題省
NGO	Non-Governmental Organization 非政府組織
UNCRC	United Nations Convention on the Rights of the Child 国連子どもの権利に関する委員会
UNICEF	United Nations International Children's Fund ユニセフ、国連児童基金
ヤマ	覚せい剤の一種（カンボジア語）

資料

Action Committee on Child Exploitation (1999) 'Supplementary information for the NGO Group for CRC on the issue of sexual exploitation of children and women in Cambodia'

Anneka F. (2002) 'Living In The Shadows' (IOM)

奴隷反対を訴える国際インターネットサイト: www.stophumantrafficking.org

CCPCR 'Training at the Village-level: Awareness Raising to Prevent Sexual Abuse and Sexual Exploitation of Children in Cambodia'

Child Workers in Asia 'Behind Closed Doors Child Domestic Workers'

インターネットサイト: www.cwa.tnet.co.th

Carron S. (2001) What the Professionals Know: The trafficking of children into and through, theUK for sexual purposes (ECPAT UK)

ILO-IPEC (1998)

'Combating Trafficking in Children for Labour Exploitation in the Mekong Sub-Region'

David W. 'Child Trafficking in Asia' On website: globalmarch.org

Derks A. (1997) Reintegration of Victims of Trafficking in Cambodia (IOM)

Derks A. (1997) Trafficking of Cambodian Women and Children to Thailand (IOM)

Drug Use and HIV Vulnerability (2002) Coordinated by Mith Samlanh-Friends

IOM (2002) A Study on the Situation of Cambodian Victims of Trafficking in Vietnam and Returned Victims of Trafficking from Vietnam to Cambodia Researched by SRDC

IOM (2002) Review and Assessment of the Situation of the Returned Cambodian children and Women Trafficked to Thailand and of the Assistance and Reintegration Mechanisms in Cambodia Researched by Sonia M, Lath P.

IOM Case Management Manual

Kim Sean, Pen P. (2002) 'Illegal Labor Movements:

The Case of Trafficking of Women for Sexual Exploitation'

Laura B. (1996) 'For Sale: The Innocence of Cambodia' インターネットサイト: www.canoe.ca

'Medical and Psychosocial Training of Service Provider' An extract from UNESCAP (2001)

Asia-Pacific Answers: Good Practice in Combating Commercial Exploitation of Children and Youth. 国際エクパット インターネットサイト: www.ecpat.net

Panudda B. and June K. (2001) 'Trafficking of Children:

The problem and responses worldwide' (ILO)

'Return and Reintegration of Trafficked and Other Vulnerable Women & Children.'

An extract from UNESCAP (2001) Asia-Pacific Answers: Good Practice in CSEC and Youth. On ECPAT International website: www.ecpat.net

Stacey S. 'How UNICEF is working to curb the sexual exploitation of children' (ユニセフ)

'Trafficking in Children for Labour Exploitation in the Mekong Sub-region:

a Framework for Action' (1998) ILO インターネットッサイト: www.ilo.org

UNICEF

'Children on the Edge: Protecting Children from Sexual Exploitation and
Trafficking in East Asia and the Pacific'

US Government (2002) Victims of Trafficking and Violence Protection ACT 2000 Trafficking
in Persons Report

Yim p. 'CCPCR Addressing, the Sexual Exploitation of Girls IN CAMBODIA'

付録

聞き取り調査のための問診表

(以下に質問項目を列挙するが、実際の質問の仕方は必ずしも下記と同様ではなく、回答者がより自発的に答え、話をするように留意した。)

インタビュー日時:

担当者氏名:

1. 子どもに関する基本情報

氏名:

性別:

年齢:

出生地:

NGO、プロジェクト名:

プロジェクトに参加してからの期間:

身体的特徴、人種的背景、言語:

2. タイにトラフィッキングされる以前の状況

家庭の状況

- タイに行く前にはどこに住んでいたか?
- 上記場所に移る以前は、どこに住んでいたか? 頻繁に居所を変え移動したか?
- 家族は何人いたか?
- 誰といっしょにいたか? 家族は全員一緒に住んでいたか?
- 両親ともいない場合、誰に面倒を見てもらっていたか?
- 家族で病気になったものはいたか?
- 両親とも生存しているか? 死亡の場合は、いつどのようにして?

家族の経済状況

- 家族は何をしているか?
- 家庭の生活、経済状況はどうだったか?
- 家族は家や土地、財産を所有していたか?
- 家族に借金があったか?

家族との関係

- 母親、父親、兄弟姉妹その他の家族のことが好きか?
- 家族との楽しい思い出はあるか?
- 家庭内で問題、いさかいはあったか?

家庭内での子どもの日常生活、経験

- 毎日の生活はどうだったか?
- 学校には通っていたか?

- いっしょに遊ぶ仲間がいたか？
- 何か仕事をするよう強制されたか？よく、弟や妹の面倒を見たか？
- いっしょに過ごすことが多かったのは誰か？
- 家庭内で言葉、或いは身体的暴力を受けたりしたことがあるか？
- 両親に大切にされていたと思うか？
- 両親の関係はよかったか？離婚したことはなかったか？
- 両親が激しい口論をしたり、争ったりしているのを見たことがあるか？

3. タイでの境遇

トラフィッキングの状況

- タイに行ったのはいつか？何歳だったか？
- タイにはどのくらいの期間いたか？
- タイではどこに滞在したか？
- タイにはどのようにして着いたか？
- 自分できたかったか、または、強要されていったか？そうならば、誰に強要されたか？
- 誰といっしょに行ったか？
- なぜタイに行ったか？
- タイには何度行ったか？
- タイではどのような場所に誰と住んだか？

労働の状況

- どのような仕事に従事したか？
- どこで働いたか？どのような客を相手にしたか？
- 一日の労働時間はどれくらいだったか？
- 誰に仕事を与えられたか？
- 一日の収入はいくらだったか？収入は誰が管理したか？
- お金をどのように使ったか？
- 仕事は好きだったか？

タイで直面した問題

- タイでの生活、仕事は好きだったか？
- 何にいちばん興味があったか？
- タイで学校に通ったり、教育を受けたりすることはあったか？
- 嫌な思い出はあるか？恐ろしい思いをしたことはあるか？
- 衣食住の状況はどうだったか？
- 健康上の問題はなかったか？
- 薬物使用、シンナー吸引、飲酒などしたか？

- 街のギャングとけんかしたことがあるか、または悪い友達はいなかったか？
- トラフィッカー、外国人または警察官による威嚇、虐待、体罰、嫌がらせを受けたことはあるか？
- スリ、窃盗、薬物売買などの犯罪に携わったことがあるか？
- 思いやりや、愛情を受けたことはあるか？無視され、ないがしろにされていなかったか？
- 自分のおかれていた状況をどのように感じていたか？
- ホームシックにかかったり、家族のことが気がかりだったりしたことはなかったか？
- 家族と連絡は取り合っていたか？

帰還の方法

- 警察に逮捕され、刑務所に送られたか？
- タイの孤児院に送られたか？そこでの生活はどうだったか？
- 警察によって国境に追放になったか？その後どこへ行ったか？

4. カンボジアに帰還後の困難

現在の生活と将来の展望

- センターでは毎日何をしているか？
- センターにいることは好きか？何がいちばん好きか？
- 生活、プログラム、職員に満足しているか？
- 自由時間には何をするか？
- 今、特にしたいことはあるか？
- 将来家庭を持ちたいか？
- 将来の夢は何か？将来に対する計画はあるか？

家族との別離

- 家族が健在か、どこにいるか知っているか？
- 家族のもとに戻って暮らしたいか？
- 家族が恋しいか？
- 家族との最後のコンタクトはいつか？どのようだったか？
- 家族が自分を受け入れてくれると思うか？
- 故郷が好きか？どんなところか？村人はどんなか？
- 故郷に帰りたと思うか？怖かったり、恥ずかしかったりするか？
- 故郷の村や人々の特徴はどんなか？

心理的な状況（感情的・行動的な問題）

- 勉強、学校や職業訓練は最近どうか？
- 親しい友達がいるか？悩み事を友達に相談するか？

- 誰のことが一番好きか？
- 趣味は何か？
- 毎日よく眠ることができるか？
- 幸せに感じることもあるか？
- 喫煙や飲酒が多いか？
- ドラッグやシンナーを吸うことがあるか？
- ホームシックが強いのか？家族のことが心配か？
- 誰のことが一番好きか？誰かに対して怒りを感じるか？感じるのは何故か？
- 不安や恐れ、ストレスなどを感じるか？
- 落ち込んだり絶望的になったりすることがあるか？
- 孤独感を感じることもあるか？
- 何かに恥を感じることもあるか？
- シェルターから逃げ出したいと思うことや逃げ出した経験があるか？
- 将来恋人を持ちたいと思うか？
- 性的な活動に興味があるか？
- 将来結婚したり子どもを持ったりしたいと思うか？
- カンボジアの文化が好きか？カンボジア人と違和感を感じることもあるか？
- カンボジアにずっと住みたいと思うか？

再トラフィッキングへのリスク

- タイでの生活が恋しいか？
- タイに戻りたいと思うか？
- 家や故郷に戻ったことがあるか？
- 戻った場合、家族の反応はどんなだったか？
- 家に戻っていたとき、何をしていたか？
- タイに再度行ったのは何故か？

謝辞

このリサーチのチームに加わってくれたスレイ・サカン、サム・サビン、エム・ミリアの3名に感謝を述べたい。また、参加してくれたすべての若者たち、有益な情報や観察を提供してくれたカンボジア政府や国際・国連機関また国際・現地のNGOのスタッフや代表の方々にも感謝の言葉を送りたい。特に国境なき医師団日本基金のリサーチへのご支援には心から感謝する。最後にこのリサーチを実施する機会と時間を与えてくれた国境なき子どもたちにお礼をいいたい。ありがとうございました。

タイヘトラフィッキングされたカンボジアの子ども、青少年に関する調査報告

— 心的外傷となる経験の検証 —

大竹綾子

特定非営利活動法人 国境なき子どもたち

特定非営利活動法人 国境なき医師団日本基金（研究助成）

第二版 2003年11月25日作成 禁 無断複製・転載

特定非営利活動法人 国境なき子どもたち（KnK）

会長：小川 道幸

専務理事：守谷 季美枝

〒162-0056 東京都新宿区若松町 33-6 菱和パレス若松町 11 階

TEL：03-5155-2506

FAX：03-5155-2507